

東大現代文完全解説

Anchor

平成28年度 第一問 第四問

収録

ver. 1.0.0



この教材の読み方	3
平成28年度	5
第1問	5
本文解説	5
設問解説	5
設問（一）	5
設問（二）	9
設問（三）	13
設問（四）	16
設問（五）	20
第4問	34
本文解説	34
説明解説	37
設問（一）	38
設問（二）	42
設問（三）	53
設問（四）	60

この教材の読み方

＜虎の巻＞の重要性

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、＜虎の巻＞と＜各年度問題解説＞から成り立っている。＜虎の巻＞では、各年度の問題に共通して通用する方法論について説明している。＜各年度問題解説＞では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り＜各年度問題解説＞のみを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ＜虎の巻＞を参照してから、そして参照しながら、＜各年度問題解説＞を読むようにしてほしい。当たり前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とするかが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というものは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてその教材の内容について議論することもとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。また、文章内を根拠にしたとしても、論理性を欠いてもいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様では

あるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

平成28年度

第1問

内田樹「反知性主義者たちの肖像」

本文解説

久々に、ひどい問題が出たものだ。いや、一周回って、すばらしい問題なのかもしれない。どこまで俯瞰的にこの文章を読むかで、この文章にこの傍線を引き、この設問を出した人の意図をどう推し量るかが変わる、奇妙な問題であった。そういう意味では、一周回っても、受験問題としてはあまりよろしくないともいえる。例年にないほど、最後の問題は別解の多い問題になっているのはそのためだ。

さて、この文章は、東大の過去問史上に類例のないほど、全体として情報量が少ない。情報量が少ないのに、傍線はいつもと同じだけ引かれているから、例年以上に、細かいところを丁寧に読んで、極力ミスをしないうように気をつけたい。

したがって、文章全体の構造で言うべきことはほとんど無い。強いて言えば、全体が二つの意味段落から構成されていることに注意できれば十分である。一つ目は、形式段落1-4で、大まかにいえば、反知性主義者とは、自分の誤りを認められない人物であることが主張されている。二つ目は、形式段落5-10で、概略としては、知性は個人的なものではなく集団的なものであることが主張されている。そのそれぞれにおいて、世間一般で語られる「知性」と、著者が定義する「知性」が対比され、論が進められていく。

とはいえ、（情報量が少ないということもあり）ここで詳しい対比を展開してもしょうがないので、詳細な中身については、設問ごとの解説をしながら見ていくことにしよう。

設問解説

設問（一）

問題

「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」（傍線部ア）とはどういう人のことか、説明せよ。

解答例	未知のことに出逢ったとき、真理性の判断は留保した上で、まずは自分が納得できたかどうかで自らの知的枠組みを刷新するかを判断できる人。(65字)
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「どういう人のことか？」という設問文に応えるためには？ ・ 「どういう人か」を考えるためにはどこから考え始めればいいのか？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「そのような」身体反応とは何か？ ・ 「さしあたり…代える」とはどういうことか？ ・ 「知性的な人」とはどういう人か？

構成フェーズ

虎の巻どおり、まずは設問文を見ると、「どういう人のことか」とある。「どういうことか」とは問われていない。それゆえ、この設問では、傍線部をそのまま説明するよりも、むしろ意味をつかんで平易に説明することが求められていることが分かる。

次に、傍線部をみる。すると、「そのような身体反応を以ってさしあたり理非の判断に代えることができる人」とある。どうやら、「そのような身体反応」とはなにかを探究すること無しには先に進めなさそうだ。ここからは読解フェーズに入り、傍線部の指し示す人物とはどのような人物かをみていくこととする。

読解フェーズ

「そのような身体反応」とは何だろうか。言うまでもなく、直前の「『得心がいったか』『腑に落ちたか』『気持ち片づいたか』どうかを自分の内側をみつめて判断する」ことである。これは、「身体」という用語が使われているものの、「納得感」といった感情・感性のカテゴリーに属するものを意味している。これは、身体という言葉から連想されるスポーツのようなものではなく、合理的ではないが、なにかしらの判断力である。ここからは、傍線部に戻って、意味をもっと正確にとっていく。「そのような身体反応」の意味を代入すると、「納得したかをさしあたり理非の判断に代えることができる人」とまとめられる。したがって、次に読み解いていくべきは、「さしあたり理非の判断に代える」とはどういうことかである。ここが分かれば、答えは完成する。

「さしあたり…代える」という表現から、「納得したかどうか」＝「理非の判断」という等式は成り立たない。ここを読み間違えている解答例が世の中に氾濫している。ここでは、理非の判

断に代えているだけなので、理非の判断をしてはいけないのだ。理非の判断をしないということに関しては、フッサールが概念化した「エポケー」が思い起こされる。これは哲学の一分野である現象学の言葉で、「真理であるかどうかを判断することをいったんやめて、対象そのものに向き合う」ことを意味する。ここで、「さしあたり…代える」といわれているのは、この「エポケー」を意味していると考えられる。つまり、納得したかどうかを理非の判断に代えるというのは、理非の判断をするまえに対象を目の前にした自分の納得感を確かめるということである。

それでは、「納得したかどうかを、さしあたり理非の判断に代える」のは、どのような状況で起こるのだろうか。筆者は、この段落の冒頭で、バルトを引用して、未知のものに出逢ったときの反応から、知的であるかを区別できるとする主張に共感を示している。それを受けての傍線部なのだから、「未知のものに出逢ったときに、真理かどうかの判断を留保し、まずは納得いったかどうかで代える」ような人が、筆者のいう、知的な人なのである。

しかし、さらに読み進めてみよう。傍線部は「知性的な人」といいかえられ、そのあと、「そのような人たち」は「知的な枠組みをそのつど作り替えている」とある。そして知性は「そういう」「知の自己刷新」のことを意味していると主張される。これら全ては指示語でつながっていて、傍線部で指し示している「人」の説明となっている。解答にはここまで盛り込んで構成することが求められる。というのも、構成フェーズで見たように、ここでは、対象となる「人」の説明が求められているからである。

他社の解答例講評

赤本

答案	自説に固執せず、他人の説に耳を傾けて納得できるかどうかを判断し、自分の知的枠組みを作り替えることを喜びとする人。(56字)			
Schip採点	4点	読解点：2点	構成点：1点	表現点：1点

「さしあたり…代える」というのは重要で、あくまで納得するかどうかは、真理性の判断に代えられるだけである。納得感がそのまま真理性の判断の根拠として通用するわけではない。その意味で、傍線部をもっとしっかり読み解いてから解答を書くべきだっただろう。また、今回は減点していないが、この意味段落は「未知のことに出逢ったとき」のことに限定して始まっており、他人の話は未知のことの一事例として提示されていたので、その点に留意して答案を作成できるとベストだった。とはいえ、簡潔に本文の内容を反映できており、未知のことか他人の話かに関しては減点するほどのミスではないので読解点を減点してはいない。

駿台（青本）

答案	他者の言葉を自らの身体的な実感でその当否について判断し、知的枠組みを柔軟に刷新して未知なるものを捉えようとする人。(57字)			
----	--	--	--	--

Schip採点	5点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：1点
---------	----	--------	--------	--------

よい答案である。簡潔に内容がよくまとまっている。

河合塾

答案	他人の話をわかったつもりにならず、それに耳を傾け、その内容を実感として納得できたか否かを、自らの知の枠組みが揺らぐままに内省できる人。（67字）
----	--

Schip採点	2点	読解点：1点	構成点：1点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

「他人の話をわかったつもりにならず」というのはあくまで外部目線であり、筆者が定義することの反知性主義的な人は、自分は正しいと思っている、「わかったつもり」ではなく「わかっている」と思っている（自分では）。その点で、表現が冒頭だけ外部目線なのは違和感がある。また、「自らの知の枠組みが揺らぐままに内省」というのは本文でも述べられていないことだし、設問の要求からはずれている。最終的には、判断しないとイケないのに内省で終わってしまっただけは解答としては不十分である。いったん真理性を留保して聴き、納得できたかで真理性の判断に代え、最後に真理だと分かれば知的枠組みを刷新する。その一連のプロセスが描き出されていない。

東進ハイスクール

答案	自説に固執せずに、他人がもたらす未知のものを受け容れ、自らの知的枠組みを刷新しながら、それが自分の内的感覚と適合するかどうかをもって目下の是非を判断する人。（78字）
----	---

Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：-1点
---------	----	--------	--------	---------

要素は全て答えられている。しかし、長い。これでは本番の解答用紙に書き込んだときにみみずのような字になってしまう。また、「知的枠組みを刷新しながら…目下の是非を判断」とあるが、「理非の判断に代える」ということは、「理非の判断」と「身体反応」はあくまで別物ではあるので、実は本文の内容と若干反しているといえる。

代々木ゼミナール

答案	他者の言説をいったんは受容し、それが引き起こす納得や了解などの全身的な感覚を通して物事の正否を判断し、自らの知を更新し続ける人。（64字）
----	---

Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：1点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

問題点だらけだ。この解答も「さしあたり…代える」という傍線部のニュアンスを踏まえきれていない。「納得や了解などの全身的な感覚」という部分に字数を使いすぎたのが問題であろう。「全身」という言葉の意図も不明である。「全身」と言うからには、「身体の一部」との対比が想定されるべきだが、そのような議論は本文に全く存在しない。また、東進ハイスクールの答案と同様、「身体反応」と「理非の判断」が一体化して捉えられてしまっていることも誤読である。

また、後半の「自らの知を更新し続ける」という表現も、筆者はわざわざ知識の蓄積ではなく枠組みの刷新だと断っているのに、「知」ということばで曖昧にする必要はなかったはずである。

スタディサプリ（旺文社）

答案	他者の言葉がはらむ未知のものを、既成の知的枠組みを基準に裁断せず、自らの内的感覚にかなえば受け容れて自己を新たにしようとする人。（64字）
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

まず「既成の枠組み」では、誰の枠組みなのか不明瞭である。既成の「一般的に共有された」知的枠組みであるとも読み得る。また、「さしあたり…代える」というニュアンスは「新たにしようとする」という表現で出ている一方で、「自己を新たに」というのは本文の「知的枠組みの刷新」からは程遠い。設問文と傍線部はうまく捉えられているのに、本文の読み損ないと、表現が不十分なので損をしている答案である。

設問（二）

問題	「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	反知性主義者は、自説は例外なく真理であると誤解しており、他者による理非の判断に照らして自分の知的枠組みを刷新できないということ。（64字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 設問は「どういうことか」という問いにどう応えるか？・ 傍線部をどこから明らかにしていくか？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「この人」とはどんな人か？・ 「あらゆることについて正解をすでに知っている」と同値な箇所はどこか？

構成フェーズ

設問文をみると「どういうことか、説明せよ」とある。素直に、傍線部を言い換えればよい。

それでは、傍線部はどうなっているか。傍線部は「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」とある。それゆえ、次に「この人」とは何かを確認しなければならない。続けて、

「あらゆることについて正解をすでに知っている」ことの意味を分かりやすく説明することが求められる。

読解フェーズ

傍線部にいう「この人」とは、この形式段落の冒頭にでてくる「反知性主義者」のことである。なぜならば、この形式段落の2文目の主語は、反知性主義者であり、これを受けて次の文も書かれ、傍線部に到達しているからである。したがって、「反知性主義者は」「あらゆることについて正解をすでに知っている」とはどういうことかを問わねばなるまい。

その具体例は、傍線部の前にある文章である。「一つのトピックについて、手持ちの合切袋から、自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらかでも取り出すことができる。」という一文である。これは傍線部の意味を推測する手がかりにはなるが、傍線部と直接対応するものではない。なぜなら、「一つのトピックについて…」の文のあとに、「けれども」とおいてから、「私たちの心は晴れることがない」とあり、それについて、「というのは」と理由が展開されているからである。接続詞にみる論理的なつながりからいって、傍線部と「一つのトピックについて…」の文章が直接対応しているということとはありえない。ここを見逃している予備校の解答例は数知れない。

そこで、傍線部の後ろを見てみよう。そこでは、「正解をすでに知っている以上」とあって、傍線部を踏まえたさらなる論理展開がなされている。というのも「Aである以上B」という表現は、「Aを前提とするならばB」と同値だからである。したがって、この部分も傍線部の意味内容を推測する手がかりにはなるが直接的な材料にはならないことに留意すべきである。その上で、そこをみると、「ことの理非の判断を私に委ねる気がない」という態度であることが分かる。

以上で、反知性主義者の特徴が二つ抽出された。「自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらかでも取り出すことができる」というものと、「ことの理非の判断を私に委ねる気がない」というものである。この二つをうまくまとめれば解答の大部分を構成できる。ただし、気をつけておかななくてはならないのが、「『あなたが同意しようとしまいと、私の語ることの真理性はいささかも揺るがない』というのが反知性主義者の基本的なマナー」という一文である。ここでは、反知性主義者の基本が、「ことの理非の判断を私に委ねる気がない」方におかれている。傍線部の主語は「反知性主義者」だったのだから、解答も「ことの理非の判断を私に委ねる気がない」方に重点を置いて書くべきだろう。筆者自らが「基本的なマナー」とまで言っているのだから。

最後に、傍線部に今一度戻っておこう。「反知性主義者は、あらゆることについて正解をすでに知っている」とはどういうことなのかを説明しなければならない。データやエビデンスを取り出すのは傍線部から引き出される具体的な行為であり、理非の判断を委ねることがないのは傍線部の結果である。傍線部それ自体を説明するには、傍線部を自分で言い換えなければならない。

反知性主義者が理非の判断を他者に委ねることがないのはなぜだろうか。「『あなたの同意が得られないようであれば、もう一度勉強して出直してきます』というようなことは 残念ながら反知性主義者は決して言ってくれない。」という一文に着目してみよう。反知性主義者は、自分の語ることはすべて真理であり、他者の反応によって自分の語ることの真理性がゆるがされることを想定していないのである。自分の語ることの真理性がゆらいでこそ、自分の知的枠組みを問い直し、刷新することが可能となる。その基本的な「知性」の条件（筆者によればだが）が欠けているのが反知性主義者なのだ。その結果として、他者に理非の判断を委ねることはないのである。

ここまでをまとめると解答になる。余談になるが、このような人間が想像できない人は、DEATH NOTEの夜神月を想定するといい。世間的には素晴らしく頭のよい人間だと思われるが、自分の語ることは、Lになんといわれようと、松田になんといわれようと、疑いようなく真理であり、自分の語ることを変更しようとししない態度。これこそが、筆者内田樹の定義する「反知性主義者」なのである。夜神月を「反知性主義」（知性的ではない）と呼ぶところに、筆者の論考の面白みがある。通常、夜神月は「頭はよかったが、道徳的に問題があった」などと論評されがちだが、ここでは「頭がよかった」のところに筆者は切り込んでいっているのだ。夜神月は自分のことを新世界の神だといったが、それは偽りの神だったのである。神は知性があるので、筆者の定義でいえば、きっと柔軟であり、知的な枠組みをその都度つくりかえられるのだろう。

他社の解答例講評

赤本

答案	反知性主義者はその豊富な知識や情報から得た真理を唯一絶対であると盲信して、一切の批判に耳を傾けないということ。（55字）
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

まず、表現上の問題で「得た真理を…盲信」という表現は、反知性主義者が真理だと信じ込んでいるものが真理なわけではなく（だとすると複数の真理が対決することになってしまう）、真理ではないものを真理だと信じ込んでいて、真理に到達するために対話をするのだということがうまく伝わらないので避けるべきである。ここでは、傍線部にそのまま対応していないので構成点を1点減点した。

また、批判に耳を傾けないとはつまりどういうことかということ、柔軟に知的枠組みを刷新しながらともに真理を探究しないということだから、ここも尻切れトンボとなってしまっている。そこで、表現点は加点していない。

駿台（青本）

答案	反知性主義者は自己の信ずる真理性を絶対的なものだと思い込み、他者の判断を考量する余地は全く持たないということ。（60字）
----	--

Schip採点	4点	読解点：2点	構成点：1点	表現点：1点
---------	----	--------	--------	--------

概ねいい答案だが、傍線部自体の説明をする必要があった。そこが抜けているのが惜しい。傍線部そのものの説明がなされていないので構成点が1点減点された。

河合塾

答案	自説を根拠づける豊富な知識を盾にして他人に一方的に語る人は、自らの思考枠がすべてに妥当する絶対性を備えていると思い込んでいること。（65字）			
Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：-1点

まず「知的枠組み」を「思考枠」という別な概念に置き換えるのはやめよう。筆者じきじきに「身体感覚」の大切さをいっていて、それを知性と絡めているのだから、「知的」を「思考」に置き換えてはだめである。また、「思考枠が…絶対性を備えている」というのは日本語が不明瞭である。これらの欠点により、表現点が1点減点された。

東進ハイスクール

答案	反知性主義者は、自らの知的枠組みを固定して、過剰なまでに豊かな自らの客観的な知識に基づいて、自説の真理性を確信し、理非の判断を下し終えているということ。（76字）			
Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：-1点

要素は全て入っているにも関わらず、ドラドラと長く75字を超えてしまっており、答案用紙に収まりそうにない。「真理性の確信」と「理非の判断を下し終えている」はどちらか一つで十分だっただろう。よって、内容面では問題はないが、表現点を減点した。

代々木ゼミナール

答案	すべてのことについて自分の判断こそ絶対の真実だと思い込み、他者の見解によってそれに修正や検討を加える姿勢を一切もたないということ。（65字）			
Schip採点	4点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：1点

本文の誤読が見られる。知性ある人が他者の見解によって修正するのは、知的枠組みであって、自分の判断そのものではない。それゆえ、後半部分で読解点を減点せざるをえない。

スタディサプリ（旺文社）

答案	反知性主義者は、自己の枠組みの中の知識や情報に基づく自らの理非の判断を絶対視し、その外部にあるものの意義を認めないということ。（63字）			
Schip採点	2点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：-1点

設問には応えようとしているが、本文の誤読と表現のミスがみられる。まず、枠組みは知的枠組みであることを明示しよう。ここでは、知性の話をしているのだから。それゆえ、読解点を1点減点した。また、「枠組みの中の知識や情報」という表現も不適切。枠組みを構成するのもまた知識や情報なのだから。さらに、「外部にあるものの意義を認めない」という表現も「意義」という新しい概念が導入されているので本文の内容とずれてしまっている。ここで表現点を1点減点した。

設問（三）

問題	「『あなたには生きていない理由がない』とされているに等しい」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	反知性主義者が理非の判断を他者に委ねないことは、集団的叡智として働くべき知性の営みから他者の存在を疎外することに等しいということ。（63字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 設問文はなにか？ ・ 等しいとはどういう形式を意味するか？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 傍線部はなにと比較されているか？ ・ 「生きていない理由がない」とはどういうことか？

構成フェーズ

設問文をみると「どういうことか、説明せよ」とあるので、丁寧に言い換えよう。

次に、傍線部をみよう。「『あなたには生きていない理由がない』とされているに等しい」とある。ここで、文末の「等しい」に着目しよう。等しいというのは「 $A=B$ 」という形式をもっている。それゆえ、傍線部に明示されていない「A」があるはずである。それはなにかを問わなければならない。ついで、「B」は「『あなたには生きていない理由がない』とされている」と会話文のいった文章になっているので、ここも適切に言い換える必要があるだろう。

読解フェーズ

まずは、「A」の部分を同定しよう。「あなたが何を考えようと、何をどう判断しようと、それは理非の判断に關与しない」というのが、傍線部の主部であり、「A」の内容になる。ここは、それまで論じられてきた、「ことの理非を他者に委ねる気がない」ことを意味している。

それでは、「『あなたには生きている理由がない』と言われている」とはどういうことか。ここを説明するのが最も難しい（恐らくこの問題全体を通して）。「生きている理由」とはなにか。ここでは、生きている「意味」ではなくて、「理由」という言葉が使われている。では、生きている「理由」とはなになのか。そもそも「理由」とはなにか。理由とは、結論を導出するのに必要な根拠のことである。結論は「生きていること」そのものである。生きていることを成り立たせている、その前提はなにか。

このように問うていくと、傍線部の後を見ていく必要があることに気付く。「知性というのは個人においてではなく、集団として発動するものだ」と私は思っている」とある。また「知性は『集合的叡智』として働くのでなければ何の意味もない。」ともある。ここにヒントがある。

「生きている」という存在の事実そのものは、根拠なしに成り立つかもしれない。しかし、その存在が認識されるかどうかは、他者が必要になってくる。それゆえ、もし筆者が述べるように、知性が集団として発動するものなのだとすれば、理非の判断をすることが知性的な営みに参加することであり、ひいては共同体に属することの証明になる。共同体に属することが認められない者は、存在論的には生きているかもしれないが、認識論的には生きていることにはならない。というのも、生きている理由がないからだ。生きている理由として、共同体に属していること。それが無いという事態のことを「疎外」という。

なかなか本文から読み取るのは難しい問題であった。ただし、背景知識がなくても、記号論的な同値や対比といったものをうまく使いつつ、それを踏み台として、意味論的な領域に飛翔できれば、解答のよすがは掴めたのではないか。いずれにしても差がつく問題であっただろうと思う。

他社の解答例講評

赤本

答案	知性に乏しい人間は真理の解明にはまったく役立たず、思索や批判をしても意味がない、と宣言されたことになるということ。(57字)			
Schip採点	1点	読解点：0点	構成点：1点	表現点：0点

まず、傍線部の「あなた」は「知性に乏しい人間」に限定されているわけでは無い。それゆえ、構成点を1点減点した。また、ここでこのように知性という言葉を使うことは、筆者の「知性」「反知性」の定義が分かっていないことになる。というのも、ここでは、一般的に思われている知性ある人、筆者の言う反知性主義者が、宣言する側だからである。さらに、「思索や批判をし

でも意味がない」だけで「生きている理由がない」ということを示すためには、知性は集団的なもので、そこへの参加ができないというロジックが別に必要である。以上の観点から、読解点は1点もつけることができない。

駿台（青本）

答案	自己を絶対化して他者の判断を無化する反知性主義者の言動は、人々の生きる力を否定して衰弱させる機能を持つということ。（57字）
Schip採点	2点 読解点：0点 構成点：2点 表現点：0点

「生きている理由がない」とはなにかと問われて、「生きる力を否定して衰弱させる機能」と答えるのではあまりにもトートロジーである。生きることは、他者とともにあることによって成り立つという要素が不可欠である。よって、読解点は与えられない。

河合塾

答案	自分の思考が他人に無視されることは、他者と応答し合いながら知を生産していくという人間の生のあり方が否定されるのと同じだということ。（65字）
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

要点を簡潔にまとめたよい答案である。このような答案が書けるように、受験生のみんなも努力を重ねてほしい。

東進ハイスクール

答案	自らの下した理非の判断を絶対視し、他人の思考や判断を受け容れない反知性主義者の態度は、他人の存在そのものを否定していることと等価であるということ。（73字）
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

「他人の存在そのものの否定」が集団として働く知的営為からの排除に基盤をおいていることを指摘しないと本文読解としては不十分である。そこで読解点を1点減点した。また、字数が65字を超えているので表現点は与えられない。

代々木ゼミナール

答案	自説のみが正しく、他者の見解は一切不要と考えることは、他者の思考や判断、ひいてはその存在そのものを否定することと同じだということ。（65字）
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

これも東進ハイスクールの解答と同じく、存在そのものの否定とはどういうものなのかにまで踏み込むことが必要である。そこで読解点を1点減点した。

答案	自他の関わりにおいて生を営むのが人間なのに、自己の考えが他に何の影響も及ぼさないなら、自己の存在意義自体が否定されるということ。（64字）
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：1点

本文は知性と知的営為の話をしているのに、この回答は生きる意味一般にまで話を広げてしまっている。このように過度な一般化をしてはいけない。過度な一般化をすると、本文が読めていないという点で読解点が減点され、傍線部と解答がずれることで構成点も減点されてしまう。

設問（四）

問題	「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」（傍線部エ）とはどういう力のことか、説明せよ。
解答例	他者の行動を誘発することを触媒として、情報収集から合意形成までを担う集合的叡智を活性化し、集団全体の知的パフォーマンスを高める力。（65字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「どういう力か」という設問にはどう答えたらいいか。 ・ 傍線部全体はどのように言い換えられるか。 <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「その力動的プロセス」とはなにか？ ・ 知性を定義する条件とはなにか？

構成フェーズ

まずは、設問文をみてみよう。「どういう力」とある。ここでも、「どういうことか」ではなく、「どういう力」とあるのだから、傍線部を素直にいいかえるよりも、その対象をしっかり説明することに力点を置くべきであることが分かる。（にも関わらず、傍線部をただ言い換えただけの予備校の解答例が頻出しているのはとても悲しいことである。）

次に、傍線部をみてみよう。「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」とある。それゆえ、まずは「その力動的プロセス」の内容を明らかにすることが仕事になりそうだ。しかし、それだけで満足してはいけない。傍線部のあとに、「（傍線部）の全体を『知性』と呼びた

い」と筆者が述べているように、知性そのものの考察へと旅立つことなしに、「力」の説明はできないのだから。

読解フェーズ

傍線部の直前をみると、「人間は集団として情報を取り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う」という一文が発見できる。これがそのまま傍線部の「その力動的プロセス」の内容となる。しかし、傍線部を素直に言い換える問題ではないのだから、この一文をだらだらと解答に書き込むことは馬鹿げている。

結局のところ、傍線部とは「活気づけ、駆動させる力」なのであるから、「活気づけ、駆動させる」とはどういうことを明らかにし、そちらに重点をおいて解答を構成すべきだろう。その内容は、傍線部のあとにある。長いので、段落を変えて引用する。

ある人の話を聴いているうちに、ずっと忘れていた昔のできごとをふと思い出したり、しばらく音信のなかった人に手紙を書きたくなったり、凝った料理が作りたくなったり、家の掃除がしたくなったり、たまっていたアイロンかけをしたくなったりしたら、それは知性が活性化したことの具体的な徴候である。私はそう考えている。「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと思う。

ここから読み取れるのは、知性の条件として、「他者の行動を誘発する」ことが重要であるということである。その行動自体が、いわゆる知性的なものである必要はまったくない。「家の掃除」「たまっていたアイロンかけ」といった行動でよいのである。何でもいいが、とにかく他者の行動を誘発すること。それが知性の第一条件である。

知性には、もう一つ条件がある。それを知性の第二条件と呼ぼう。ここのヒントになる文章も、長くだらだらと書かれているので、以下に段落を変えて引用することとする。

知性は個人の属性ではなく、集団的にしか発動しない。だから、ある個人が知性的であるかは、その人の個人が私的に所有する知識量や知能指数や演算能力によっては考量できない。そうではなくて、その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいない場合よりも高まった場合に、事後的にその人は「知性的」な人物だったと判定される。

さて、知性の第二条件とは「集団全体の知的パフォーマンス」が高まったかどうかであることが読み取れる。しかも、集団全体の知的パフォーマンスの向上は「事後的」に起こることであることが明示されている。それによって、知性の全体像が明らかになる。

まずは、個人間のレベルで、知性ある人がいれば、他者の行動が誘発される。次に、集団のレベルで、知性ある人が誘発した様々な人の行動が織り合わさることによって、集団全体の知的パフォーマンスが向上するのである。この順序なのであって、逆ではない。そのことをよく心しておかなくてはならない（もちろんそもそもこの二つのステップが書かれていない解答は論外なのであるが）。

言い換えれば、知性ある人が、直接的に集団全体の知的パフォーマンスを向上させることはできないのである。それは事後的になされることにすぎない。にも関わらず、集団全体の知的パフォーマンスを向上させることが、知的にとって本質的な条件なのである。知性ある人は、あくまで周囲に影響を与えることで、全体に影響を及ぼすのである。このことは、「触媒」という言葉を使えばうまく説明できる。触媒なしには結果は実現されない。けれども、触媒はあくまで結果を実現するためのものである。この関係を見失わないように答案は書きたいものである。

他社の解答例講評

赤本

答案	合意形成に向けた活発な議論を促し、新たな発想や行動を呼び覚ますような、集団の知的パフォーマンスを高める力。（53字）
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

全体的によくまとまっているが、集団的な知的営為の力動的プロセスを活性化させる触媒として他者の発想を呼び覚ますという行為があるという本文の論理関係が十分に踏まえていない。そこで読解点を1点減点とした。

駿台（青本）

答案	相互に影響を及ぼすことで人々に新たな気付きと発想をもたらし、集団全体の知的活動を刺激して合意形成へと促す知性の力。（57字）
Schip採点	2点 読解点：0点 構成点：2点 表現点：0点

必ずしも、知的活動を刺激することで、合意形成へと至るわけではない。集団としての知的活動のプロセス自体は、「人間は集団として情報を取り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う」で間違っていないけれども、それと他者の行動を誘発して、集団の知的パフォーマンスを高めることは独立である。例えば、アイロンがけをしたくなることは合意形成へと促しているわけではない。よって、この読解ミスにより、読解点は与えられない。

河合塾

答案	集団内でのやりとりを通じた合意形成に至る過程で、個人だけでは思いもよらぬ発想を人々にもたらし、人々相互の活発な知的活動を創出する力。(66字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

設問には応えようとしているが、「人々相互の活発な知的活動を創出」がいまいち。知的パフォーマンスの向上を言い換えたかったのだろうが、「創出」に限定している点が本文とは食い違っている。本文ではあくまで活性化という言葉をつかっており、これはもともと活動としてはあるが、量や質が向上する場合も含まれるはずである。「思いもよらぬ発想」という箇所も本文の内容と異なってしまっている。果たして「家の掃除がしたくなる」ことは思いもよらぬ発想だろうか？さらに、「人々相互」という言葉がぎこちない。以上の点から、読解点が減点され、表現点は加算されなかった。

東進ハイスクール

答案	人間が集団として情報を得て、その軽重を吟味して仮説を立て、対処の合意形成を行う過程において、他者の知の自己刷新を促すというかたちでの影響を他者たちに及ぼす力。(79字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：-1点

長い。前半のプロセスを説明するのに字数を使い過ぎている。75字をはるかにオーバーしているので、もちろん表現点は減点される。また、「他者の知の自己刷新」は言い過ぎであろう。アイロンをかけたくなるのは知の枠組みの変更ではないだろう。そこで読解点も減点された。

代々木ゼミナール

答案	集団において情報を摂取・吟味し、特定の仮説の下に対処法の合意形成するという一連の動的過程を活性化し、他者の創造的な行動を促す力。(64字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

この答案も前半部分の指示語の説明に字数を使いすぎて要点を見失っている。触媒として他者の行動を促すことであくまで最終的には集団の知的パフォーマンスを向上させる力が傍線部の力である。また、この力が促す他者の行動は「創造的」なものに限定されない。よって、解答の内容が本文と食い違っているばかりか、解答の着地も誤っており、設問に答えられていない。ここで読解点と構成点がそれぞれ減点された。

スタディサプリ（旺文社）

答案	人々の心が創発的な営みへと向かうような刺激を与え続けることで、集団全体として状況を認識し対処してゆく知的営為を活性化し促進する力。
----	---

「創発的」という言葉の意味を誤解して使っているのではないか。創発とは、事前には予測できないけれども、複数のアクターの相互作用によって、事後的に有意義なパターンが現象することである。したがって、「心が創発的な営みへ向かう」では意味がとれない。それゆえ、他者に新しい発想をもたらすことで、集団の知的パフォーマンスを向上するという文意が明確に表現できていない。以上の誤りにより、読解点と構成点がそれぞれ1点減点、表現点も減点された。

設問（五）

問題

「この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない」（傍線部オ）とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で 一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。

＜解答＞

知性とは、属人的な資質・能力ではなく、他者の行動を誘発することで集団の知的活動を活性化する力だと定義すれば、他者と対話しつつ自らの知的枠組みを刷新できる人間が知的で、自分の知的能力を過信している人間は反知性的だと正しく判断できるということ。（120字）

＜別解1（反知性的な人間を詳細に記載）＞

知性とは、属人的なものではなく、集団の知的活動を活性化する力だと定義すると、身体反応を真理性の判断に代えることができず、自分の知的枠組みを刷新することもなく、他者を集団的な知的営為から疎外する人間を、反知性的だと正しく炙り出せるということ。（120字）

解答例

＜別解2（論理の循環を指摘）＞

筆者の人物鑑定は「自らの知的枠組みを刷新し、他者の行動を誘発しながら、集団の知的活動を活性化する力」という自らの知性の定義にのみ依拠しているので、「他者を集団的な知的営為から疎外する人間が反知性的」という判断は論理的に誤り得ないということ。（120字）

＜別解3（筆者自身が再帰的に批判されていることを指摘）＞

筆者は「自らの知的枠組みを刷新し、他者の行動を誘発しながら、集団の知的活動を活性化する力」を知性と定義しているが、その定義に基くと、筆者は自らの定義のみに基き、知性的であるか否かを判断しているため、反知性的であると言わざるをえないということ。（120字）

構成フェーズ

- ・ 「どういうことか？」という設問
- ・ 傍線部の指示語はなにを指しているか？
- ・ 「本文全体の趣旨」はなにを踏まえればいいのか？

思考の目次

読解フェーズ

- ・ 「この基準」とはなにか？
- ・ 「人物鑑定」とはなにをすることか？
- ・ 「本文全体の趣旨」はどこまで深く突っ込むべきか？

構成フェーズ

設問文をまずみよう。「本文全体の趣旨」を踏まえた上で、「どういうことか」を説明するように要求されている。本文全体の趣旨は、後回しにして、まずは傍線部をみてみよう。

傍線部は、「この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない」とある。ここでは、「この基準」をまずは明確化しなければならないことが分かる。さらに、読解フェーズでは「人物鑑定を過ったことはない」とはどういうことかを深く問うていくことになる。

読解フェーズ

それでは、早速「この基準」についてみていこう。傍線部直前をみると次のようにある。

その人が活発にご本人の「知力」を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を「反知性的」とみなすことにしている。

ここでは、「Xの場合、Yとみなす」という構文が使われている。これは「Xを基準として、Yを定義する」とことと同じ意味である。例えば、「自分の悩みを聞いてくれない場合、その人は友達ではない」といったように（ほかにも例文をつくってみよう）。そこで、基準としてのXは「集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合」だと定義できる。

このことは、本文全体の趣旨を踏まえると、知性を属人的なものではなく、集団的なものとして定義するということになる。というのも、意味段落2のはじめに「すこしていねいに説明したい」とあり、それを受けてここまで論が展開されているからである。ここまでをまとめると、「知性を属人的なものとしてではなく、集団的なものとして定義した場合、人物鑑定を過ったことはない」という意味になる。

さらに、本文の趣旨を踏まえていくと、知性が集団的なものであることの意味が、設問（４）の解答も援用して分かってくる。他者の行動を誘発することを触媒として、集団の知的パフォーマンスを向上する」ことが、知性が集団的なものであることの意味なのであった。よってここまでだけを踏まえて、回答をまとめると以下ようになる。

知性を属人的なものとしてではなく、他者の行動を誘発することを触媒として、集団の知的パフォーマンスを向上する集団的なものとして定義した場合、「人物鑑定を過ったことはない」ということ。

それでは、一方で、「人物鑑定を過ったことはない」とはどういうことなのかを問題にしよう。これがもっとも難しいところである（論理的な問題というよりは含みが多すぎて）。まずは、なにを鑑定するのか？というところから見ていこう。本文最初から、「知性」「反知性主義」というのがテーマである。それゆえ、ここで鑑定されているのは、どんな人間が知性的であり、どんな人間が反知性的であるのか、ということになろう。

その鑑定内容は、本文全体（特に意味段落Ⅰ）の内容を踏まえればすぐに分かる。ここでは、知的能力が優れていて、データをたくさん取り出すことができるといった一般的に思われる知性的な人のうち、自分の知的枠組みを刷新できない人のことが「反知性的」とであると定義されていた。逆に、「自分の知的枠組み」をつくりかえられる人が「知的」とであると定義されていた。

この設問は、このように、本文全体でいっていたことを論理的につなげることを要求している。その構造は単純で、「知性」が「集団的なもの」として定義できれば、夜神月のような知的枠組みが固定している人間を反知性的な人間、知的枠組みが柔軟である人間が知性的であると判断できるのである。ここまでをまとめれば、上記の＜解答＞や＜別解Ⅰ＞の様な優等生的な解答ができてあがる。

読解フェーズ（その２）

しかし、ここまでで受験的には恐らく十分だが、もっと深く読み込むこともできる。聡明な読者なら気付いただろうが、この解答は論理的であるがゆえに、自己循環的である。「Aであるか否かで、Bを定義するとしたら、AでないのがBでなく、AであるのがBである」といっているだけだからである。数学であればこれでよいが、これは現代文であり、論を進めている以上、記号にはなんらかの対象があるはずなのだ。ここに気付いた人は「困った」という感想を抱くだろう。どう本文の論を説明しても、説明したことにならない、と。

ここで、駿台（青本）の解答例のように「現代の日本」を持ち出して、実践的な方向に逃げることはできる。しかし、傍線部自体の説明からはどうしても逸れてしまい、万全な解答であるとは言いがたい。あくまで、気休め程度にしかならない。それでは、どうするか。

コラム：「知性」の定義と「反知性主義」の意味

「反知性主義」という言葉が、最近流行しているが、その意味が人口に膾炙しているとは必ずしもいえない。反知性主義とは、本文でも紹介されているリチャード・ホーフスタッターの『アメリカの反知性主義』（訳：田村哲夫、みすず書房、2003）において導入された概念である。ホーフスタッターがなにを意図していたのかを明確にするために、第一章「現代の反知性主義」からいくらか引用してみよう。

《反知性主義》（anti-intellectualism）という耳なれない用語が、自己批判と仲間内の相互攻撃を意味するアメリカ社会の日常語になったのは五〇年代だった。（p.3）

私が反知性主義と呼ぶ心的姿勢と理念の共通の特徴は、知的な生き方およびそれを同表するとされる人びとに対する憤りと疑惑である。そしてそのような生き方の価値をつねに極小化しようとする傾向である。あえて定義するならば、このような一般的な公式が役に立つだろう。（p.6）

この本で取り上げる反知性主義は、私が反合理主義と呼ぶ哲学上の教義と同一ではないことを明らかにしておく。【……】教養人向きの反合理主義は、私の著述のなかでは二次的な意味しかもたない。（p.7）

本書の中心的な問題は広範囲にみられる社会的態度、政治的行動、そして教養が並程度か低い人びとの反応であって、整然とした理論を問題とするのは副次的な場合のみである。私がもっとも関心をいただくのは、われわれの生活に影響をおよぼし、知的で文化的な生活を深刻なほど抑制したり貧弱にするさまざまな反知性主義的な態度なのである。（p.7）

以上の引用を読めば明らかなように、ホーフスタッターが定義し、分析しようとしているのは「反-知性主義」である。これは、知的なものへの敬意をもった生き方に反対する態度のことである。例えば、ここから想起されるのは、厳密に世界を描写しようとする科学者の営みに対して、「複雑で分かりにくいから、もっと簡単に説明してほしい」と懇願するような大衆の姿であろう。

一方、本文の筆者である内田樹氏が説明している「反知性主義」は意味がいささか異なる。ここでは、一般的に定義されるような「知性」に対して、筆者の定義する「知性」が対置されている。データやエビデンスを操れる人が科学的で知性ある人だと思われるが、筆者はそれに反論し、自分の身体感覚に敏感であり、納得できたかを確かめながら、知の枠組みが刷新できる人間を知性ある人間と定義しているのである。

ここまでを俯瞰すると、ホーフスタッターのいう反合理主義が、内田樹氏のいう反知性主義と重なってくることがわかるだろう。そして、内田樹氏のいう知性は、ホーフスタッターのいう反知性主義と（二次的な意味でしかなくても）重なりあうこともわかるだろう。したがって、両者の用いる言葉（知性、反知性主義）は同じでも、その意味は大きく異なる。真逆の意味だとすら言えるかもしれない。この点を理解していなくても本文の読解には差し支えないが、これらの語を使用して思考する場合は、自分がいったいなにを意味しようとしているのか、具体的にはどのような現象を指しているのかを常に意識することが重要である。

ここでは、メタレベルを一つあげてみよう。まずは、自己循環そのものを説明しよう。そうすれば、「皮肉的な受験生」答案を書くことができる。「Aと定義した以上、AはBにならざるをえない」とか、「必然的にそうなる」とか、トートロジ的な導出がなされていることを表現すればいい。このことを踏まえると、＜別解2＞の様な答案を書くことが可能になるだろう。

しかしその先がある。それは、筆者の定義そのものが、筆者の論を批判している、という構造に気付くことである。つまり、筆者の論が破綻していることを見抜くことである。傍線部は、筆者の論構造の破綻を象徴しているのである。では、それはいったいどういうことか。

筆者は、知性とは「知的枠組みを刷新できること」と定義している。そして、他者に理非の判断を委ねることのない人間を「反知性主義」であるといっている。そうであるとするならば、その言葉は筆者の論にそのままかえってくることになる。筆者は、自分の定義にのみ基いて、論述を進めている。実際、この論考には、筆者の定義は、筆者の感覚にのみ基いて、根拠をもっていない。したがって、他者からの批判が届かない構造になっている。筆者の定義を受け容れれば、筆者の結論を受け容れるしかない。一方、筆者の定義を批判することは、筆者が根拠を挙げている以上できない。これでは、読者は「生きている理由がない」と同じだ。このことを本文に即して丁寧に実証するために、具体的に、筆者が、「知性」や「反知性」を定義しているところを挙げてみよう。

- ・ 「そのような身体反応を持ってさしあたり理非の判断に代えることができる人を私は『知性的な人』だとみなすことにしている。」

- ＊ ここでは「みなしている」（個人的に定義している）。

- ・ 「個人的な定義だが、しばらくこの仮説に基づいて話を進めたい。」

- ＊ 個人的な定義であることを認めている。

- ＊ 私は私をそのような気分にさせる人間のことを「反知性的」と見なすことにしている。

- ＊ まだ「みなした」まま。

- ・ 「だが、私はそれとは違う考え方をする。知性というのは個人においてではなく、集団として発動するものだとは私は思っている。知性は『集合的叡智』として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなものを私は知性と呼ばない。」

- ＊ 私は思っている、私は呼ばないといった、個人的な見解に終始している。

- ＊ 私は、知性というのは個人に属するものというより、集団的な現象だと考えている。

- ＊ 私は考えているという、個人的な見解に終始している。

・ 「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を『知性』と呼びたいと私は思うのである。」

＊ 呼びたいと思うも、個人的な見解。

＊ 「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと私は思う。

＊ ここでも、「呼びたいと思う」。

・ 「個人的な知的能力はずいぶん高いようだが、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるというようなことは現実にはしばしば起こる。きわめて頻繁に起こっている。その人が活発にご本人の『知力』を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を『反知性的』とみなすことにしている。」

＊ 最後まで、「みなすことにしている」。

ここまででは、筆者は独自に定義にした「知性的」「反知性的」のラベルを人々に付けてきただけである。ラベルを付けるだけなら何も問題は無い。究極的に言えば、この「知性的」というラベルは、どんな名前のラベルでも良いのだから。ただ人々をAグループとBグループに分けただけだ。しかし、そのラベル付けによって、本件の「人物鑑定」をすることには問題が生じる。なぜなら、「人物鑑定」とは、その人に関する何かしらの真理を決定することであり、そしてそれが「誤ったことはない」と言い切るということは、その決定が少なくともこれまでは絶対の真理であり続けてきたと主張することになるからである。最後にこの一文があることによって、論理のブーメランは投げられてしまった。独自に定義にした「知性的」「反知性的」のラベリングは、知性的であるかどうかという命題の真偽も決定することができると主張してしまったのである。「鑑定」するのが「知性的か反知性的か」ということではない場合には、ブーメランが不良品と化して筆者を救うこともあり得るのだが、先述の通り、この文章は最初から最後まで「知性的か反知性的か」という対比についてしか述べられていないので、残念ながら他のことを鑑定しているのだという読解をすることはできない。（ただし、こう言えるのは、あくまで受験問題になっているこの範囲の文章だけを読む限りであるということは付け加えておきたい。）

実際に、これが本文の最も良いまとめなのかもしれない。筆者は、自分勝手な定義をふりまわすばかりで、対話の道を閉ざしている。そこで、最後に傍線部で「過ったことはない」という傲慢な発言が飛び出す。それは自己循環的な論理に依拠しているからだと知ってか知らずか。そこを指摘できれば、きっとこの問題を出題した東大教授の真の意味を汲み取ったことになるだろう。テキストは、公のものになった以上、筆者のものではなく、読者のものになる。筆者はそのときもはや筆頭読者であるにすぎない。だとするならば、筆者も気づいていない、テキストそのもの

の論理的な循環性と、メタ的な自己批判性をこそ、指摘できるのが真によい読者であり、テキスト解読者だということになるだろう。

知性とは、属人的な資質・能力ではなく、他者の行動を誘発することで集団の知的活動を活性化する力だと定義すれば、他者と対話しつつ自らの知的枠組みを刷新できる人間が知的で、自分の知的能力を過信している人間は反知性的だと正しく判断できるということ。

<別解1（反知性的な人間を詳細に記載）>

知性とは、属人的なものではなく、集団の知的活動を活性化する力だと定義すると、身体反応を真理性の判断に代えることができず、自分の知的枠組みを刷新することもなく、他者を集団的な知的営為から疎外する人間を、反知性的だと正しく炙り出せるということ。（120字）

<別解2（論理の循環を指摘）>

筆者の人物鑑定は「自らの知的枠組みを刷新し、他者の行動を誘発しながら、集団の知的活動を活性化する力」という自らの知性の定義にのみ依拠しているので、「他者を集団的な知的営為から疎外する人間が反知性的」という判断は論理的に誤り得ないということ。（120字）

<別解3（筆者自身が再帰的に批判されていることを指摘）>

筆者は「自らの知的枠組みを刷新し、他者の行動を誘発しながら、集団の知的活動を活性化する力」を知性と定義しているが、その定義に基くと、筆者は自らの定義のみに基き、知性的であるか否かを判断しているため、反知性的であると言わざるをえないということ。（120字）

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	属人的な資質・能力ではなく、	0～2点
	知性とは集団的な能力である	他者の行動を誘発することで集団の知的活動を活性化する力	0～2点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…だと定義すれば、	0～2点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	自分の知的能力を過信している人間は反知性的だ	0～2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	他者と対話しつつ自らの知的枠組みを刷新できる人間が知的 OR 他者を集団的な知的営為から疎外する人間	0～2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われる人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	…人間が知的で、…は反知性的だと正しく判断できる OR …人間が反知性的だと正しく炙り出せる OR …という判断は論理的に誤り得ない OR 筆者は…反知性的であると言わざるをえない	0～2点
（表現点	全体の読みやすさ ・修飾語が長すぎないか ・主語と述語は対応しているか 言葉選びの正確性 ・筆者の概念を正確に表しているか ・勝手に概念を捏造していないか ・勝手に概念の繋がりを捏造していないか		±2点

他社の解答例講評

赤本

答案	知性とは個人の知識や情報の豊かさを言うのではなく、自分の知的な枠組みを作り替え、他者にも新たな発想や行動を促す力を言うのであって、知的能力は高くても集団全体の知的パフォーマンスを下げってしまうような人は反知性的と判断して間違いないということ。（120字）
Schip採点	9点 （採点基準は下記を参照）

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	知性とは個人の知識や情報の豊かさを言うのではなく	2点
	知性とは集団的な能力である	自分の知的な枠組みを作り替え、他者にも新たな発想や行動を促す力 ※集団への影響まで踏み込みたい	1点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…言うのであって ※あくまで筆者の作った基準・定義であることが指摘されていない（一般的に妥当する定義ではない）	1点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
人物鑑定	反知的な人間の特徴	知的能力は高くても集団全体の知的パフォーマンスを下げってしまうような人は反知的な	2点
	知的な人間の特徴 OR反知的な人間の特徴その2	(記述なし)	0点
を過ったことがない	知的なか反知的なかを正しく判断できる OR一般的には知的なだと思われる人間を反知主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない(論理が循環している) OR筆者自身が反知主義	反知的なだと判断して間違いない	1点
(表現点	全体の読みやすさ ・修飾語が長すぎないか ・主語と述語は対応しているか 言葉選びの正確性 ・筆者の概念を正確に表しているか ・勝手に概念を捏造していないか ・勝手に概念の繋がりを捏造していないか	(一読して意味をとることができる)	2点

駿台（青本）

答案	現在の日本を考えると、自己の独断的な主張を周囲に強いる人間が知的なであった例のないことから、私たちは反知主義者の過った情熱に屈することなく、知性を重視して他者とともに自己刷新をつづけ、集団全体を知的に活性化していく必要があるということ。(119字)		
Schip採点	4点	(採点基準は下記を参照)	

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	(記載なし)	0点
	知性とは集団的な能力である	(記載なし)	0点
	知性の定義OR知性の基準	(記載なし)	0点
人物鑑定	反知的な人間の特徴	自己の独断的な主張を周囲に強いる人間が知的なであった例のないこと	2点
	知的な人間の特徴 OR反知的な人間の特徴その2	自己刷新をつづけ、集団全体を知的に活性化していく必要がある	2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われる人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	現在の日本を考えると…求められている ※これでは傍線部の説明にはなっていない	0点
（表現点	全体の読みやすさ ・修飾語が長すぎないか ・主語と述語は対応しているか 言葉選びの正確性 ・筆者の概念を正確に表しているか ・勝手に概念を捏造していないか ・勝手に概念の繋がりを捏造していないか	（そもそも全体の構成が全くの誤りである）	0点

河合塾

答案	知性とは、個々人が互いに異なる意見に耳を傾け、自らの思考枠を刷新しつつ集団の知的活動を活性化するものである以上、自己の知識を誇示し、独断的な考えを主張するだけで、他の人々の知的創造力を失わせる人物が知性的であったためしはない、ということ。（120字）		
Schip採点	9点	（採点基準は下記を参照）	

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	個々人が互いに異なる意見に耳を傾け、 ※直接的な言及ではないが、個人的な資質・能力はないことは暗示できている	1点
	知性とは集団的な能力である	自らの思考枠を刷新しつつ集団の知的活動を活性化するもの	2点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…である以上 ※知性の一般的な定義ではない	1点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	自己の知識を誇示し、独断的な考えを主張するだけで、	2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	他の人々の知的創造力を失わせる人物	2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われる人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	知性的であったであつたためしはない	2点
（表現点	全体の読みやすさ ・修飾語が長すぎないか ・主語と述語は対応しているか 言葉選びの正確性 ・筆者の概念を正確に表しているか ・勝手に概念を捏造していないか ・勝手に概念の繋がりを捏造していないか	（思考枠という言葉は一般的ではないし、筆者の捉える知性を矮小化してしまう）	-1点

東進ハイスクール

答案	知性とは、個人に属する知識のことではなく、他者の判断を受け容れつつ、他者の知の枠組みを刷新していく集団的な現象であり、集団の知的鋭意を向上させたかどうかを事後的に知性的か否かの基準とする人物評価の妥当性に、筆者は自信があるということ。（120字）
Schip採点	8点 （採点基準は下記を参照）

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	個人に属する知識のことではなく、	2点
	知性とは集団的な能力である	他者の判断を受け容れつつ、他者の知の枠組みを刷新していく集団的な現象 ※集団への影響を指摘したい	1点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…であり ※これも客観的であるかのような書きぶり	1点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	（記載なし）	0点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	集団の知的鋭意を向上させたかどうかを事後的に知性的か否かの基準とする	2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われる人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	人物評価の妥当性に、筆者は自信がある ※論理的に誤ることはないに近い解答	2点
（表現点）			0点

代々木ゼミナール

答案	知性とは他者の言説に慎重に耳を傾け、その受容を通して自らの知の枠組みを不断に更新する営みであり、自らの正しさを盲信し、他者の存在を頭から否定することで集団の知的活動を阻害する人間は、確実に「反知性的」存在とみなすことができるということ。（118字）		
Schip採点	8点	（採点基準は下記を参照）	

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	他者の言説に慎重に耳を傾け、その受容を通して自らの知の枠組みを不断に更新する営みであり、 ※暗示している	1点
	知性とは集団的な能力である	（記載なし）	0点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…であり ※これも客観的であるかのような書きぶり	1点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	自らの正しさを盲信し、他者の存在を頭から否定することで	2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	集団の知的活動を阻害する人間は	2点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われる人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	確実に「反知性的」存在とみなすことができる	2点
（表現点）			0点

スタディサプリ（旺文社）

答案	現在の日本には、既成の知識や情報で全てを裁断し知識量や知的能力で自己の主張を認めさせることが知性だと思いこむ反知性主義を排し、自他が身体性において結びつき互いに触発し更新し合うことで集団全体の知的営みを活性化する真の知性が必要だということ。（120字）		
Schip採点	4点	（採点基準は下記を参照）	

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	他者の言説に慎重に耳を傾け、その受容を通して自らの知の枠組みを不断に更新する営みであり、 ※暗示している	0点
	知性とは集団的な能力である	（記載なし）	0点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…であり ※これも客観的であるかのような書きぶり	0点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	既成の知識や情報で全てを裁断し知識量や知的能力で自己の主張を認めさせることが知性だと思いこむ反知性主義	2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	自他が身体性において結びつき互いに触発し更新し合うことで集団全体の知的営みを活性化する真の知性	2点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われる人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	真の知性が必要 ※傍線部と対応していない	0点
（表現点）			0点

※他社解答例の採点結果（最高点は34点）

	赤本	駿台（青本）	河合塾	東進	代々木	SS
設問 1	4点	5点	2点	3点	3点	2点
設問 2	3点	4点	3点	3点	4点	3点
設問 3	1点	200%	5点	3点	3点	3点
設問 4	4点	2点	3点	2点	2点	1点
説明 5	9点	4点	9点	8点	8点	4点
合計	20点	16点	20点	19点	19点	13点
得点率（%）	59%	47%	59%	56%	56%	38%

第4問

堀江敏幸「青空の中和のあとで」

本文解説

丁寧にエッセイの本文読解の虎の巻を適用しよう。そうすればだんだんこの文章の輪郭ははつきりしていくはずだ。しかし、この文章はちょっと難しいのも事実だ。なぜなら、本文全体を通底するエッセイのテーマ（以下これを「全体テーマ」と呼びたい）が明確にどこかに書いてあるわけではないからだ。だから、単に記述を整理しただけでは、筆者の描く事柄がそれぞれバラバラのまま存在してしまっていて、それらの間の関係がわからなくなってしまい、とりとめのない読解しかできない。直接的に書かれていないながらも、各々の話題から全体テーマを想像し、今度はその全体テーマを元に各々の話題で言われていることと丁寧に解きほぐしていく必要がある（この読解の大まかな流れ自体はエッセイの読み方の基本なので、そこは見失わないでほしい）。

それでは以下、本文を頭から順に一緒に読解してみたい。

最初に述べられている話題は、「青空」についてだ。どうやらここでは、以下の主張があるように見える。

晴天が＜日常＞で、荒天は＜非日常＞であるように思えるが、実はその ＜非日常＞は＜日常＞と断絶しているわけではなく、 ＜日常＞の延長線上にあるもの（として捉えるべき）だ。

この ＜日常＞と ＜非日常＞の対比は、何やら重要そうである。また筆者は、その ＜非日常＞の表れとしての荒天を楽しみに待っているようだ。荒天に何かの「救いを求め」、それを「ありがたい仕合わせ」だとか、「一種の恩寵」だとかと表現している。だけど、ここだけを読んでも、なぜ荒天がそんなに喜ばしいものなのかはちょっとわからない。これについては、一旦保留。とりあえずわかったことをまとめて次に進もう。

＜日常＞	⇔	＜非日常＞ あくまで＜日常＞延長線上にある
＜日常＞における＜非日常＞への破れ目は、「ありがたい仕合わせ」「一種の恩寵」である。なぜかは不明。		

二つ目の話題はどうやら「青色」についてであるようだ。天候のところでも青についての記述はあったが、それと関係があるのだろうか？筆者は、「青色」は海のものにしても空のものにしても「幻」であるのだという。というのも、海の青は「手を沈めて水をすくったとたん」消えてしまう。一方で空の青は「いったん空気中の分子につかまったあと放出された青い光の散乱にすぎない」「孤独な色」であり、「その色に、私たちは背伸びをしても手を届かせることができない」

い。」確かに、海の実体は大量の水の運動であるし、空の青もまた、光の反射という運動の結果である。水にも光にも、色は無いはずだ。

そして、筆者によれば、このような青の様子は、「穏やかな表情を見せながらも弾かれつづける青の粒の運動を静止したひろがりとして示すという意味において、日常に似ている」のである。

＜日常＞と「青色」の関係が示された。ここから逆に、＜日常＞の姿が窺い知れそうだ。＜日常＞も、表面的には穏やかな幻の顔を見せつつも、その裏側には何か隠しているのだろう。さっきの天候の話と結びつけてみると、＜日常＞とは晴天のことだったのだから、「青空」＝「青色」＜日常＞は表面的な幻の顔で、その裏に荒天＝物理運動＝＜非日常＞を隠し持っている、そしてこの構図が青という色と似ている、というのが自然な読みだ（この「＝」は多少ざっくりしたものではあるが）。ちょっと共通性が見えてきた。ここまでの全体テーマはこんな感じだろうか？

＜日常＞ 表層的。幻に過ぎない。	⇔	＜非日常＞ この運動性は 常に＜日常＞の延長線上にある。
＜日常＞における＜非日常＞への破れ目は、「ありがたい仕合わせ」「一種の恩寵」である。なぜかは不明。		

三つ目の話題は「日常」だ。「単調な日々を単調なまま過ごすには、ときに暴発的なエネルギーが必要になる。しかしその暴発は、あくまで自分の心のなかで静かに処分するものだから、表にあらわれでることはない」。

むむ、さっきの図式と似ている。「暴発」は隠れていて見えないのだから、＜非日常＞のことだろう。だとすれば逆に表にある「単調な日々」というのは、おそらく＜日常＞と同じことを指していそう。よって、なるほど、先程の「青色」では「運動」と表現されていた＜非日常＞だが、今度は「暴発」とまで表現されている。ああ、そういえば、最初の話である「青空」における＜非日常＞も非常に荒々しいもののことだった。

しかし次を見ると、さらに気になることが書いてある。「単調な日々を単調なまま過ごすには、ときに暴発的なエネルギーが必要になる」。「暴発」はただ「単調な日々」の裏側にあるだけでなく、「単調な日々」にとって必要不可欠であるようだ。これはどういうことだろうか？本文には直接書かれていないが、考えてみよう。私はおそらく、この裏には「変わり続けられないものは無い」という思想があるのだと思っている。万物流転、諸行無常。この世では、変わらないことこそがありえないことなのだ。だとすると、本当に単調な日々というはあり得ないはずだ。しか

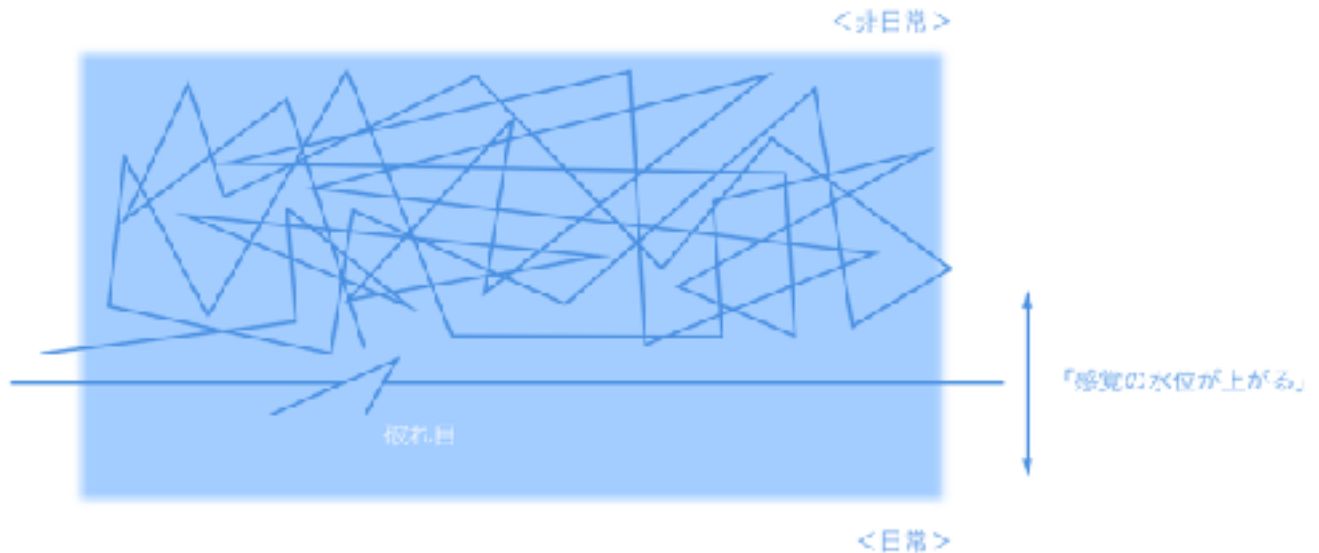
しそれは、ある。あるように見える。なぜなら、その裏に絶え間ない暴力的な運動性があるからである。筆者が伝えたいイメージはそんなことではなかろうか。

そんなことを考えていたら、こう書いてあった。「そういう裏面のある日常とこの季節の乱脈な天候との相性は、案外いいのだ」。やはり、ここで、最初の話題である「青空」と、この「日常」という二つのモチーフが繋がった。全体テーマを整理しよう。

<日常>	⇔	<非日常>
表層的。 本当の単調など、幻に過ぎないはず。 しかし、それは目の前に見えている。	なぜなら…	暴発的な運動が日常の中に常にある。 だから単調なく日常>は存在できる。
<日常>における<非日常>への破れ目は、「ありがたい仕合わせ」「一種の恩寵」である。なぜかは不明。		

さらに見ていくと、ついに筆者が天候の急変を待ち望む理由も書いてあったみたいだ。「青空の急激な変化を待ち望むのは、見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙に中和するためでもある」。筆者はどうやら、天空の青（=<日常>）の破れ目としての荒天（=<非日常>）に、自分の内面が秘めている暴発（=<非日常>）を投影していたようだ。それは、内面と青空が似た構図を持っているから成し得ることである。なるほど、荒天を通じて、自分の日常を成り立たせてくれている暴発を確認することができるのであろう。「嗚呼、自分のこの日常はこうして成り立っているんだ」。そう感じられることこそが「ありがたい仕合わせ」「一種の恩寵」であったのだろう。

ここまで来ると、高度に比喩的で今まで謎に満ちていた筆者の言葉遣いも納得できるようになる。天候の急変は「破れ目」を作ると言っていた。きっとこれは、<日常>と<非日常>の間にできる穴のことだったのだろう。そして内面についての記述には「内壁」という表現もあった。またそう考えると、天候のところで言っていた「来る、と感じた瞬間に最初の雨粒が落ち、稲光とともに雷鳴が響いたとき、日常の感覚の水位があがる」というのは、この壁のこととも関係していそうだ。どうやら、<日常>と<非日常>の間には、浮き沈みする仕切りのような存在があるのかもしれない。よって、全体テーマはこんな感じだろうか。



天候も、青という色も、自己の内面も、＜日常＞と＜非日常＞を併せ持っている。その＜非日常＞は、基本的に表面的には見えないものだが、時に「破れ目」から姿を現わす。しかしとは言っても、そうした裏側の＜非日常＞という暴力的なまでの運動性を潜在させているからこそ＜日常＞は＜日常＞でいられるのであり、その二つは切っても切れない関係にあるのだ。だから＜非日常＞はあくまで＜日常＞への感覚の延長線上で捉えなければいけない。そういったイメージが、この文章全体に通底していると考えられるだろう。

と思ったら、本文ではこれで終わりではないようだ。最後の部分では、「赤い風船」がセンセーショナルなデビューを飾っている。「貴重な青は、天を目指さない風船の赤に吸収され、空はこちらの視線といっしょに地上へと引き戻される」。どうやら「赤い風船」は「青空」のイメージを一掃してしまったようだ。確かに、「赤い風船」はこれまでの「青空」のイメージと全く異質である。そうして泰然と青を否定する赤い風船は、筆者の「青の明滅に日常の破れ目を待つ」という自負と願望があっさり消し去り」、そして筆者は「奇妙な喜びを感じつつ、茫然とした。」のであった。筆者の身には何が起きているのか？いや待て。思えば、「青の明滅に日常の破れ目を待つ」営みは、「この小さな変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め、破れ目を縫い直したあとでまた破るような、べつの出来事を呼び寄せる」のであった。きっと筆者はこの「断続的な繰り返し」のサイクルを回し続けるのであろう。そして文章はこう締めくくられたのだった。「再び失われた青の行方を告げるように、遠く、雷鳴が響いていた」。（この最後の「赤い風船」の箇所については設問（四）の設問解説で詳しく述べる。）

説明解説

設問（一）

問題	「何かひどく損をした気さえする」（傍線部ア）とあるが、なぜそういう気がするのか、説明せよ。
解答例	所謂天気予報を当てにすることは、天候の変化をその直前に予感し、日常の延長線上に非日常を見出すための機宜を無に帰することになるから。（65字）
思考の目次	構成フェーズ
	・ 何が「損」をする原因か？
	・ 「損」とは何か？何でそれが「損」になるのか？
	読解フェーズ
	・ <予感>とはどういうものか？
	・ <予感>を失うことは何を失うことなのか？
	表現フェーズ

構成フェーズ

設問に「なぜそういう気がするのか、説明せよ」とある。「そういう気」とは筆者の考えなので、「筆者がなぜそう考えるのか」について回答する必要があることがわかる。よって、回答すべきその理由は、筆者の主観的で個人的な感じ方であって良いが、一方で読み手の常識や推察はいつも以上に注意して排除するべきであろう。

次に傍線部を見る。何が「損」なのか。傍線部の直前を見ると、「『これから降るらしいよ』といった会話」とある。さらに遡ると、「予報は、こちらの行動を縛り、息苦しくする」とある。これらは同じことについて述べている。よって、この<予報が行動を縛り息苦しくすること>が「損」なのである。

では、「損」とはどういうことだろうか？言葉の意味としては、損とは「少なくしてしまうこと」「壊してしまうこと」である。よって、<予報が行動を縛り息苦しくすること>によって、何かが失われたり壊れたりするということだ。その失われたり壊れたりするものとは何だろうか？傍線部の段落で<予報>と対比的に描かれているものを探そう。それは、「予感」である。つまりまとめると、この問題の解答の骨子は以下になるべきであろう。

<予報が行動を縛り息苦しくすること>は、<予感>を失わせてしまうから。

読解フェーズ

まず<予感>について詳しく確認したい。「自分のアンテナを通じて入ってきた瞬間にそれが現実の出来事として生起する、つまり予感とほとんど時差のない一つの体験であって」とあるように、人間は本来<予感>によって現象をその直前に感覚することができるのだ。逆に<予報>は現象が起きるだいぶ前に知るものである。よって、<予報>を当てにした時点で既に<予感>は失われてしまうのである。ここまでを踏まえて解答を書いてみよう。

天候の変化を事前に知らせる予報を当てにすることは、人間が本来持っているはずの、自分自身の感覚で天候の変化を直前に予感する能力を失わせてしまうから。(74字)

しかしここで、もう一步深く疑問を持って欲しい。<予感>を失うことは、なぜ損なのだろうか？言い換えれば<予感>にはどんな価値があったのだろうか？そのヒントとなるのは、傍線部の後に書いてある。筆者は、荒天を「一瞬の、ありがたい仕合わせと見なし、空の青みの再生に至る契機を、一種の恩寵として受けとめ」ている。そして、これはなぜなら、「崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする」ことで、「非日常を、まぎれもない日常として生きる」[1段落4行目]ことができるからだ（この辺りがなぜそうなるのかは、本文全体に関わることなので、わからない人は本文解説を読んで欲しい）。逆に言えば、<予報>によって事前に荒天という非日常を知ってしまうことは、本来日常と背中合わせにあるはずの非日常を、日常から引き剥がすことになる。これらのことを踏まえて、解答を書いてみよう。ここではまだ字数は気にしない。

天候の変化を事前に知らせる予報を当てにすることは、人間が本来持っているはずの、自分自身の感覚で天候の変化を直前に予感する能力を失わせ、日常の延長に非日常を見出すための好機を逸するとつながるから。(98字)

表現フェーズ

「天候の変化を事前に知らせる予報」は、一般的なものなので「天気予報」と言って差し支えないだろう。後半も、「予感を失わせ、好機を逸する」では長いので、重要度の低い「予感を失わせる」方は簡略化する。「感覚」だとか「能力」だとかいうここでは似た意味となる言葉もまとめてしまおう。「逸する」という語彙も、勿体無い感を強調するために「無に帰す」としてみた。

所謂天気予報を当てにすることは、天候の変化をその直前に予感し、日常の延長線上に非日常を見出すための機宜を無に帰することになるから。(65字)

他社の解答例講評

赤本

答案	単調な日常に突然現れる天候の崩れを非日常の恩寵と受け止める筆者にとって、予報はその貴重な機会を奪うものだから。(55字)			
Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：1点	表現点：0点

予報が「その貴重な機会を奪う」理由についての説明が不十分だ。詳しく言い換えれば、「日常と非日常は連続しており、よって人間はほぼ同時間的に非日常を予感することできるはずなので、事前にその到来を知る羽目になってしまう予報はその予感の機会を奪う」という論理がはっきりと説明されていない。「～な筆者にとって予報は貴重な機会を奪う」と述べただけでは、「～の」中に「機会を奪ってしまう」の理由が述べられているのかいないのかわからない。よって、構成点は減点された。

駿台（青本）

答案	青空の突然の崩れは、単調な日常がしばし破れる非日常の驚きを味わわせてくれるのに、予報によってその新鮮さが奪われるから。(59字)			
Schip採点	1点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：-1点

非日常の破れが私たちにもたらししてくれるのは、それが突然であることによる驚きではない。根本的に本文を読み違えていると見受けられる。結果的に設問の解答としても的を外したものになっている。また、「単調な日常がしばし破れる非日常の驚きを味わわせてくれる」の箇所は日本語として非常に読みづらい。解答は他人に読んでもらう文章であるので、減点されて然るべきであろう。

河合塾

答案	天候の崩れを、日常感覚の中で突然感じる瞬間があつてこそ、非日常的な恩寵が感じられるのであって、自己を束縛する予報はそうした契機を奪うものだから。(72字)			
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点

綺麗にまとまっている様に見えて、所々詰めが甘い。＜予感＞の要点は同時的でありつつもあくまで直前に感じることであり、「突然」感じるかどうかではない。また、「非日常的な恩寵」という表現は曖昧すぎる。＜予感＞について説明するには、日常と非日常の連続性こそが重要なのであるから、その要素を記さないといけない。この答案では本文全体の趣旨を理解していないように見えてしまう。この点で読解点を減点した。

東進ハイスクール

答案	夏の青空が急変し、その後鮮やかな回復へと向かう一連の流れという非日常的出来事を、日常の延長のなかで捉えようとする感覚が、予報を介しては得られないから。(75字)			
	夏の青空が急変し、その後鮮やかな回復へと向かう一連の流れという非日常的出来事を、日常の延長のなかで捉えようとする感覚が、予報を知ることで束縛されてしまうから。(79字)			
Schip採点	4点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：0点

まず、字数が多すぎる。表現点が減点される。「予感」が現象の直前に行われることを明示した方が、予報ー予感の対比と「予報を介して得られない」理由を明確化できるという点で望ましいが、減点はされない程度かもしれない。

代々木ゼミナール

答案	平凡な日常の中に突如訪れる不穏な予感と急激な非日常の世界を自ら体感する貴重な機会を、他者の予報によって奪われたと感じたから。(63字)			
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

ひどい答案だ。まず答案の着地が致命的に間違っている。この答案と設問を繋ぎ合わせて、設問で必要とされている形式の論理を構成すると、「奪われたと感じたから損をした気がする」となる。全く説明になっていない。「奪われた」ことは「損をしたこと」と同じことを指示しているので、その二つが因果関係は結べない。また、答案を部分的に見ても各々意味が不明である。「平凡な日常の中に突如訪れる不穏な予感と急激な非日常の世界」は何を指しているのか曖昧すぎる。「不穏」とは何のことか？「非日常」が「急激」であるとはどういうことか？そして「世界」とまで一般化する必要はあるのか？なぜその「機会」が「貴重」なのかについても不明であり、「他者の予報」によってそれが奪われる理由も不明である。「他者」と言及したからには、自他の対比が重要である様に答案からは見受けられるが、本文で論点となっているのは自他ではなく事象の連続性や時間についてである。設問と関連する風の語彙が散りばめられているが、説明すべきことは何も説明していない答案である。

スタディサプリ（旺文社）

答案	青空の崩れは突然生じてこそ非日常の感覚をもたらしてくれるのであり、情報を与えられていたのではその体験の新鮮さが失われるから。(63字)			
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

駿台（青本）の答案と似た誤りである。非日常の破れが私たちにもたらしてくれるのは、それが突然であることによる驚きではない。根本的に本文を読み違えていると考えられる。

設問（二）

問題	「青は不思議な色である」（傍線部イ）とあるが、青のどういうところが不思議なのか、説明せよ。
解答例	知覚上にのみ存在する青が、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。 (68字)
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 設問文読解・ 二種類の「青」 <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「海の青」の性質は何か？・ 「空の青」の性質は何か？・ 「海の青」と「空の青」の性質を統合して一般化するとどんな性質が見出だせるか？・ 「空の属性」とは何か？・ 「青」の性質の中のどこに逆説性があるか？・ 【発展】「重い現実」とは？・ 【発展】「青」の性質と本文全体の趣旨との関係は？ <p>表現フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 重複する表現をまとめる。

構成フェーズ

設問文を見よう。「青のどういうところが不思議なのか、説明せよ」とある。ここでのポイントは二つだ。一つは、主題が「青」に限定されているところ、もう一つは、不思議さを説明することが求められているところだ。不思議さの説明には、大抵の場合で逆説が必要だ。よってここ

までの設問文の確認によって、逆説的な「青」の性質を探るのがこの設問の基本戦略であることがわかる。次に傍線部を見るが、本問の場合は、設問文に傍線部自体の内容も書かれてしまっているのも、特に補足点はない。よって、先述の基本戦略は変わらない。

ただし、本文には二種類の「青」が挙げられていたことには注意しなければならない。傍線部直後にある「海の青」と、続く第八・第九段落にて述べられている「海の青」である。設問で「青」としか指定されていない以上、これらの両方に言及すべきだろう。よって、この二つの「青」の性質を一般化して統合することが最初の課題になりそう（もちろん、もしそれが不可能そうであったら、仕方ないのでそれぞれの性質を別個に述べることになる）。

よってここまでを踏まえて、読解フェーズでは以下の問いを検討していくことにしよう。

- ・ 「海の青」の性質は何か？
- ・ 「空の青」の性質は何か？
- ・ 「海の青」と「空の青」の性質を統合して一般化するとどんな性質が見出だせるか？
- ・ 「青」の性質の中のどこに逆説性があるか？

読解フェーズ

この読解は最高レベルに難しい。文章全体との関係性が見えにくい上に、断片的な比喻をつなぎ合わせる必要があるからだ。論理を単純に繋げばそれで終わりとはならない。なので、根気よくわかることを文章から拾い、そこに少しの想像力を足して読み解いていこう。というわけで、まずは本文の手がかりを拾っていくことから始める。

筆者は、「海の青」は「幻」だと言う。幻だということは、言葉の意味からして、実際には無いのにそう見えてしまうということだろう。筆者はその理由を「手を沈めて水をすくった途端青でなくなる」からだと言う。少し想像してみよう。海岸で海の水を掬って見る。するとそれはきっと、透明であろう。言われてみれば当たり前のことだ。ここまでをまとめると、(A-1)「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまう」ということになる。（後で参照するために傍線部にした。）

続きを見る。「海は極端に色を変えた時、幻を重い現実に変える力を持つ」。これは何のことだろう。完全に想像になるが、海の「重い現実」という言葉から連想されるのは、海難事故や津波などだろう。ただし、これはあくまで勝手な想像に過ぎない。確実にわかることは(B-1)「幻」と「(重い)現実」が対比される概念であることだ。

「重い現実」の意味については、一旦保留して次の文を見る。次の文には、「海の青」への「怖れ」と「愛」が述べられているが、これもまた難しい。先ほどの「重い現実」のイメージと総合すると、何となく、危険と隣り合わせながらも海に生きる男の姿が浮かんできそう。だがこれ

もあくまで勝手な想像だ。現代文というゲームにおいてはあまり役立たない。これも保留しておこう。

では、「空の青」について見てみよう。これもまた「幻」であるようだ。その理由は、筆者によれば、空の青は、大気中の光の散乱の中で、そのごく一部にすぎない青色の散乱のみが残った結果であるからだ。この「幻」の性質は、「海の青」と同じであろう。「海の青」も結局は青色になる波長を持った光の散乱なのだ。だから先ほど見たように、掬い上げてしまうと透明になってしまうのだ。次の文はこうだ。「私たちは背伸びをしても手を届かせることができない」。確かに、それがその波長の光が青色に見えるのは、人間の知覚がそうになっているからでしかない。人間の知覚のシステムが私たちにそう見させていると言って良いだろう。その意味で(A-2)「青色」は私たちの知覚の中にしかないのだ。だからそこに物体として到達することができない。

続く第九段落を見てみよう。まず、空は「当たり前のように遠い」とされる。空は遠くにあるのが当たり前だということだ。どういうことだろうか？ 次の文を見ると意味がわかる。「飛行機で空を飛んだら、それは近すぎてもう空の属性を失って」しまう。「空の属性」を失うということとを裏返すと、「空の属性」があるということだ。そして「空の属性」があるのは、きっと「当たり前のように遠い」時なのだろう。その意味で、「遠く眺めて、はじめてその乱反射の幻が生きる」のだと筆者は言う。この箇所を図式化すると、どうやら二項対立になりそうだ。(B-2)少しアバウトに等式関係で繋ぐと、以下のようになる。

- ・ 「遠い時」 = 「当たり前」 = 「空の属性」がある = 「幻」
- ・ 「近い時」 = 「 ? 」 = 「空の属性」は失われている = 「？」

さて、これで手がかりが出揃った。これまで出た手がかりをまとめ、できれば統合していきたい。尚、以下の(A-1)と(B-1)は「海の青」の描写からわかったこと、(A-2)と(B-2)は「空の青」の描写からわかったことである。

- ・ (A-1)「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまう」ということである。
- ・ (A-2)「青色」は私たちの知覚の中にしかない。
- ・ (B-1)「幻」と「(重い)現実」が対比される概念である。
- ・ (B-2)「遠い時」と「近い時」の対比の図式がある。

(A-1)と(A-2)はそのまま統合できそう。すると「幻」とは何かわかる。「幻」とは「実際には透明なのに青色に見えてしまうこと」であり、その意味でその青色は私たちの知覚の中にしかない」ということである。そして、(B-1)と(B-2)もまた統合できそうである。なぜなら、(B-2)の図式の中で、「遠い時」 = 「幻」という（アバウトな）等式関係があったからである。統合すると、(B-2)の最後の「？」を埋めることができる。

- ・ 「遠い時」 = 「当たり前」 = 「空の属性」がある = 「幻」

- ・ 「近い時」 = 「 ? 」 = 「空の属性」は失われている = 「現実」

この対比関係をよくみると、(A-1)と(A-2)を統合してわかった「幻」の定義と、(B-1)と(B-2)を統合してわかった対比の図式も統合できそうだ。なぜなら、後者の図式に「幻」は含まれているのだから。横に並べると長くなりすぎるので、表にして整理してみよう。

「遠い時」	「近い時」
「当たり前」	
「空の属性」がある	「空の属性」は失われている
「幻」	「現実」
青色は私たちの知覚の中にしかない	
実際には透明なのに青色に見えてしまう	

最後の「実際には透明なのに」というのは、この対比の図式の中で処理可能だろう。「実際には〇〇である」ということは、その性質は対比されている相手に包含されるべきであるはずだ。

(海や空の) 「遠い時」	(海や空の) 「近い時」
「当たり前」	
「空の属性」がある	「空の属性」は失われている
「幻」	「現実」
青色は私たちの知覚の中にしかない	
青色に見えてしまう	実際には透明である

多少アバウトな等式関係を元に図式を作ってきたものの、結果として妥当な図式が完成した。さて、最終的に私たちが取り組むべき問いは、「青」の性質の中にどんな逆説性があるかであった。よって、それを検討するには、この図式も「青」を中心に組み直すべきだろう。

「青色」	透明
「幻」	「現実」
(海や空の)「遠い時」 「空の属性」がある	(海や空の)「近い時」 「空の属性」は失われている
「当たり前」	
私たちの知覚の中にしかない	

青の性質のどんなところが逆説的なのか、少しずつ見えてこようとしているが、まだ完全にはつかみきれない。なので、もう少しこの図式について考えてみたい。そもそも、「空の属性」があるとはどういうことか？「属性」とはそのままだ「そのものに属する性質」ということだ。ということは、「空の属性」が何かから無くなるということは、そのものから「空」という性質が無くなるということだ。それはつまり「空」では無くなるということだと言って差し支えないだろう。つまり、遠くから眺めると其れは「空」であるが、近くから眺めると其の其れは「空」ではないということだ。紛らわしくなったが、本文に挙げられている飛行機の実例を考えれば簡単にわかる。飛行機で窓から見るとその空間は、地上から見た時の「空」だ。航空会社が提供するのには「空の旅」である。しかし、飛行機から窓の外を見て、「横に空があるね」と言ったらどうか。違和感がある。では、その時横にあるのは何と言うべきか。おそらく「空気」とか「大気」とかであろう。地上から見た時「空」であるそのものは、近くで見ると「空」ではなく「空気」であるということだ。同じことが「海」にも言える。「海」に行く。「海」岸に立つ。あなたは「海」の「水」を掬う。掬ったそれを何と呼ぶか。おそらく「水」であろう。譲歩しても「海水」、あくまで「水」の範疇だ。「ねえ見て、海を掬ったよ」と言ったら、あまりに詩的ではないか！

これを読んだあなたは今「言われてみれば不思議だなあ」と思ったのではないか。初めてこれに気づいた私たちもそう思った。そして、設問で求められていたのはまさにそれなのだ。ここに設問の中核がある。不思議なのは、海や空は、実際には透明な「水」や「空気」であるにもかかわらず、「幻」である「青色」こそが、それらを「海」や「空」たらしめていることなのだ。

ここまでで、答案の概略は掴めた。ただし、設問は「青のどういうところが不思議なのか」説明することだったことを忘れないようにしたい。上記の「海」と「空」と「水」と「空気」の不思議な関係を、「青」を主役を書いてみよう。

青は、「幻」であるにも関わらず、実際には透明な水や空気である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(53字)

中核は抑えたが、説明不十分な点が三つある。第一には「幻」の説明が不十分な点、第二に「水や空気である」の箇所が一般化されていない点、そして最後に「『海』や『空』たらしめる」の説明が不十分な点である。

「幻」は「実際には透明なのに青色に見えてしまうことであり、その意味でその青色は私たちの知覚の中にしかない」ということだった。前半部は答案に既に示されているので、後半部だけを盛り込めば大丈夫だ。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、実際には透明な水や空気である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(59字)

次に「水や空気である」の箇所を一般化したい。一般化して記述しない限り、それは描写したに過ぎず、説明したとは言い切れないだろう。知覚の中にしかない「幻」と対比されているのが重要であるので、「物理現象」「实在論的」などの言葉で表現するのが良い。本文中に光の反射の話が述べられていたり、後者が徒らに哲学的であることを踏まえて、ここでは前者の「物理現象」という言葉を使うことにした。参考までに、答案の下に先ほどの図式を更新したものも載せておく。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、実際には透明な物理現象である海や空を、「海」や「空」たらしめているところ。(59字)

「青色」	透明
「幻」	「現実」
(海や空の)「遠い時」 「空の属性」がある	(海や空の)「近い時」 「空の属性」は失われている
「当たり前」	
私たちの知覚の中にしかない	实在論的な物理現象

「『海』や『空』たらしめる」については、先ほどの「属性」についての議論をもう少し検討してみたい。遠くで見るか近くで見るかによって、つまり「青色」であるかによって、それが「海」や「空」であるかが変わってしまうということのおもしろさはどこにあるだろうか。それは、内実としては同じ物体・物理現象であることだろう。なのに、「海」や「空」と呼ぶかが変わってしまうのである。言い換えれば、この「海」や「空」は、あくまで言葉の上でのみ存在する概念であるということなのだ。具体的に対応する事物が存在しているように見えるこのような「海」や「空」という言葉が、実は言葉の上でのみ存在する概念という側面も持っていることを示しているのが筆者の文章のおもしろところだ。さて、これを踏まえると、答案の「『海』や『空』たらしめる」については、これらがあくまで言葉の上での話であるということを強調したい。ここまで全てを踏まえると、以下の答案が完成する。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、実際には透明な物理現象である海や空の、言葉の上での概念を規定しているところ。(59字)

ほぼ満点だ。ただ、まだ二つ改善点がある。以下に述べることは、これまでの一直線的な議論の中からは導かれないし、考える労力の割には、点数にならないかもしれない。なので発展課題だと思って見て欲しい。

まず最初の論点。これまでに触れてきたことの中で、保留してあったことが二つある。一つは、「海は極端に色を変えた時、幻を重い現実に変える力を持つ」こと、もう一つは、「海の青を離

れるのは、それを愛するのと同程度に厳しい」ということである。この中で後者については、結論から言ってしまうと私たちも結局読み解けていない。無念！ぜひ筆者と語り合わせていただきたいものだ。

しかし、前者についてはこれまでの議論を元に考察の余地がある。「現実」とは海や空の物理現象的側面であった。では、青が「極端に色を変えた時」の「重い現実」とは何のことか？「重い」にも様々な意味があるが、「深刻である」という意味にとってみよう。すると、「重い現実」とは、言わば深刻な物理現象としての海や空のことを指すことになる。ここまで来ると、「重い現実」を津波や台風などの自然災害と結びつけることも妥当な連想だと言って良いだろう。遠くから眺めると「海」であり、近づいて触れると途端に「水」になってしまう海が、津波として目の前に現れた時はどうだろうか？人々はそれを「海が襲ってきた」と感じるだろう。遠くから眺めると「空」であり、飛行機で横から見ると「空気」になってしまう空が、暴風雨として自分の家を吹き飛ばしたらどうだろうか？人々はそれを「空が暴れている」と感じるだろう（少なくとも「空気の反乱」ではないはずだ）。よって、空や海は、遠くに見る時の「幻」の「青」がその意味を定義していて、近づくと「海」や「空」ではなくなるのだが、一方で自然災害（＝怖るべき物理現象）として現前した際には、あくまで「海」や「空」に戻るのである。これもまた不思議なことだ。実は「青」の不思議さには二重の逆説があったのである。まとまりがなく、設問への答えにもなっていないが、一旦この論点を盛り込んで文章にしてみる。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、実際には透明な物理現象である海や空の、言葉の上での概念を規定している。しかしさらに一方で、物理現象としての海や空は、自然災害としてのみ現前する。（99字）

さて、もう一つの発展的な論点についても考えてみたい。それは、この「不思議な色」としての「青」がこの文章全体の趣旨（本文解説で述べた「全体テーマ」）の中でどう位置付けられるか、という点である。この文章の全体テーマは、要するに＜日常＞と＜非日常＞の対比であった。「不思議な色」としての「青」にこの対比はどう当てはまるか？これを考える上では、「青色」と透明の図式の中に取り残されていた「当たり前」と、先ほどの「重い現実」の議論が参考になるだろう。つまり、「幻」が「空」や「海」の概念を規定しているのは、あくまで「当たり前」の状況＝＜日常＞においてのみであるのだ。なぜなら、先ほど検討した通り、「重い現実」という＜非日常＞が現れ出た時、「空」や「海」の概念を規定しているのは物理現象としての側面だからである。この対比を、先ほどの図式に当てはめてまとめてみよう。

「青色」	透明
「幻」	「現実」
私たちの知覚の中にしかない	实在論的な物理現象

「青色」	透明
<p><日常> = 「当たり前」「遠い時」 において 「海」や「空」の言葉の上での概念を規定する</p>	<p><非日常> = 自然災害 において 「海」や「空」の言葉の上での概念を規定する</p> <p>※<日常>における「近い時」には 「空の属性」は失われている</p>

この<日常><非日常>の対比を組み込むことで、先ほどの仮の答案も多少はまとまりそうだ。最後の論点を盛り込んで答案を書いてみよう。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、自然災害として現前した時のみその内実である透明な物理現象によって言葉の上での概念が規定される海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。(97字)

表現フェーズ

さて、本問も表現フェーズがかなり重要になった。読解フェーズの最後の答案の問題点を確認しよう。まずは長すぎるのが問題である。局所的に言葉を削っても解決しなさそうなので、文章構成の手術をまず行う。文章構成としては、「言葉の上での概念の規定」という表現が繰り返されていることが問題だ。解決方法は二つ考えられる。一つは「言葉の上での概念の規定」を一箇所にまとめること。もう一つは、片方の「言葉の上での概念の規定」を無理やり短くしてしまうことだ。前者を取り組んでみようとするが、「言葉の上での概念の規定」に<日常>でも<非日常>でも共通して関わるのが「青」ではなく「空や海」であるので、うまくまとめられない。まとめようとする、「空や海」が主題になってしまう。よって撤退。仕方ないので後者の作戦をとる。「平常の言葉の上での概念が規定されている」という状態は、あくまで人間の捉え方の話なので、先ほどの議論で述べた「～として現前する」という表現の意味するところと近い。よって、<非日常>の空や海の概念の規定については、「現前する」という言葉で済ませてしまおう。すると以下ようになる。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、自然災害時にのみその内実である透明な物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。(78字)

「自然災害時にのみその内実である透明な物理現象として現前する海や空の」の箇所が読みにくくなったので、ここはむしろ分離しよう。

青は、人間の知覚の中にしかないにも関わらず、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。(77字)

まだ少し長いか。苦肉の策だが、逆説を簡略化してしまおう。「青」の性質説明を逆説ではなく連体修飾節にしてしまおう。

人間の知覚上にのみ存在する青が、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。(71字)

最後に最も重要度の低い語である冒頭の「人間の」を削る。この語は文脈から自明であるからだ。これで完成である。

知覚上にのみ存在する青が、内実は透明な物体であり、災害時のみ物理現象として現前する海や空の、平常の言葉の上での概念を規定しているところ。(68字)

他社の解答例講評

赤本

答案	海の青であれ空の青であれ、平凡で穏やかな表情を見せる幻の色でありながら、うちに激しいエネルギーを秘めているところ。(57字)			
Schip採点	1点	読解点：0点	構成点：1点	表現点：0点

「青は穏やかなのに激しいところが不思議である」と主張する答案である。しかし、「穏やかなのに激しい」ことを不思議さと結びつける積極的な根拠はない。「穏やかなのに激しい」ことは、おそらく「空の青こそが、いちばん平凡でいちばん種やかな表情を見せながら、(中略)日常に似ているのではないか。」という部分を根拠にしているのだろうが、この文から「穏やかなのに激しい」ことが青と日常の類似点であることは読み取れても、それが青の不思議さの中核であることを読み取ることはできない。読解フェーズで解説した通り、傍線部をその直後の文章から順に丁寧に検討していけば、穏やかさと激しさという日常と非日常の対比は、あくまで青の不思議さの構図の中の一部でしかないことがわかるだろう。

よって、この答案が根本的に的を外していることは否めない。読解点は零点だ。文章構成は不思議さについて説明する形式になっているが、要点である「幻」の説明も全く不十分であるので、構成点も辛うじて一点残るかどうかわからないところであろう。

駿台（青本）

答案	遠く手の届かない距離が生み出す幻であり、日常におけるその平穏や様相とは裏腹に、激しい力を内にはらみ持つところ。（56字）			
Schip採点	1点	読解点：0点	構成点：1点	表現点：0点

赤本と同じく、「青は穏やかなのに激しいところが不思議である」と主張する答案である。しかし、赤本の解答の講評で解説した通り、穏やかさと激しさの対比は、青の日常との類似点ではあれど、青の不思議さの中核では決して無い。「幻」の本質があたかも距離の問題である様に語られている点も誤読である。よって、この答案も、辛うじて文章構成が不思議さを説明する形式である点しか評価することはできない。

河合塾

答案	海の青は重い現実を抱えつつ、すぐえば消える幻の色であり、空の青も不穏な変化の可能性を秘めつつ、他の色から孤立した、人の手の届かない幻の色だということ。（75字）			
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

この答案の骨子は、「幻の色であるところが青の不思議なところ」だということである。これは本文の内容とずれているし、また、そもそも、不思議さの説明として不十分であろう。「幻」が常に不思議とは限らない。よって、構成点・読解点ともに与えられない。

東進ハイスクール

答案	近づきすぎると見失われ、遠くから眺めてはじめてとらえられる色や運動性を備え、感情をもたらす対象として感覚できない、手の届かない幻としてあるところ。（73字）			
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

まず、「幻であることが不思議だ」では答えになっていない。不思議さの説明に必要な逆説性が答案に見受けられないので、構成点は与えられない。また、局所的に見ても誤読がある。「幻」の本質は距離感ではない。また、「感情」という要素はおそらく「海の青を離れるのは、それを愛するのと同程度に厳しいことなのだ」という文に由来するのだろうが、そこからなぜ「青」が「感情をもたらす対象として感覚できない」ものになるのかは不明である。よって読解点も一切与えられない。

言葉と概念と規定とあなた

この設問の読解フェーズでの議論は、概念の本質は何か、平たく言えば「それをそれたらしめているものは何か？」という問いに直結している。これは哲学でも古くから議論されてきた問いだ。例えば、この問いの答え方の一つの方向性として、この本文とも近いもので言うと、本質はその概念の客観的性質の中にあるという考え方ができる。さらに本文にあった「属性」という言葉に絡めて言えば、实在論という哲学の分野において、アリストテレス以来、「属性(attribute)」と「性質(property)」という区別がされることがある。前者は本質を定義する性質であり、後者は別に欠けてても良い性質のことを指す。これは本文での「属性」の意味とほぼ同じであると考えて良いだろう。もちろん、「いや、どの性質もその概念の本質を規定するのに必要なのだ」とか、「概念の本質は、客観的な指標では決まらない」とか、違った考え方をすることも可能だ。興味があったら考えてみてほしい。

言葉と概念の関係も、この本文の議論に深く関わる論点だ。まさにこの設問の「青の不思議なところ」が指摘する様に、結局私たちは何事も言葉によって表現することが多いので、もはや何事も言葉によって規定されているのではないかと思えるところがある。このことについての問いを最初にちゃんと立てたのは、フェルディナン・ド・ソシュールとルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインである。ソシュールは、言葉で指示される概念は差異によってのみ支えられているとした。これだけではわかりにくいので例を出そう。「机」と「椅子」の二つは全く違う概念に思える。しかし、例えば、ちょうど座れそうでも物書きができそうでもある高さで、かつ背もたれが無い四本足の台が何の説明もなく置いてあったとする。あなたはそれを何と呼ぶか？ここで言いたいのは、「机」と「椅子」も、物体の上での明確な線引きはできないということだ。その意味で、「椅子」とは、「四本足の台」界の中の「机」ではないものなのであり、逆に「机」は「椅子」ではないものでしかないのだ。もしかしたら、ある言語では「机」「椅子」という言葉は無くても、「台に座る」とか「台で書く」とか言っているかもしれない。言葉の体系としてはそれでもあまり問題はなさそうだ。こうして考えると、あれ、言葉が概念を示しているのか、それとも言葉に概念が当て振られているのか、わからないようになってきたのではないか？実はこんな議論も全て吹っ飛ばしてしまうのがウィトゲンシュタインである。彼が問いに立てたことは、「結局どんな抽象的な概念について言葉で議論しても、それって『その言葉で示したその概念』でしかなくて、『その概念』そのものじゃないよね？じゃ、『その概念』について議論するのは無理じゃね？」ということである。例えば私は「美」について語りたい。しかし「美」について何を語ったところで、それは「『美』という言葉で表された美」でしかなくて、それは素晴らしい絵画を見たとき心の中に浮かぶあの「美」ではあり得ないのだ。何と悲しいことか。しかし、これに反論するのはかなり難しい。なぜなら、この文章自体も、何を言おうと所詮は「言葉で示されたそれ」でしかないのだ。仕方ない、だとしたら、唐突だが、ここで筆を置くしかない様だ。

答案	人が直接触れることのできない遠さや孤独を感じさせるとともに、その背後に現実を変える大きな力を予感させる両義性を持っているところ。（64字）
Schip採点	1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

「遠さや孤独」と「現実を変える力を予感させる」ことを対比する根拠は本文に見受けられない。また、その様な「両義性」が不思議であるということも自明ではないので説明が必要だ。局所的に見ても、「遠さや孤独を感じさせること」は「幻」の説明として不適切である。また、「幻」が「現実」へと姿を変えるのであり、「幻」が「現実」を変えるのでは無い。以上のことから、この答案もまた内容としては文章構成が不思議さを説明する形式である点しか評価することはできない。構成点の一点のみが残る。また、点数には関係しないが、「両義性」という言葉遣いも気になるところだ。「遠さや孤独」と「現実を変える力を予感させる」ことという二項は「義」なのだろうか？「両面性」だったら納得できる可能性が残されているが、「両義性」では表現が不適切だろう。

スタディサプリ（旺文社）

答案	距離を置かないと見えてこない手の届かない幻の色であり、穏やかな様相を示す一方で、同時に激しく変化する力を内包させているところ。（63字）
Schip採点	1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

赤本や青本と同じく、「青は穏やかなのに激しいところが不思議である」と主張する答案である。しかし、赤本や青本の解答の講評で解説した通り、穏やかさと激しさの対比は、青の日常との類似点ではあれど、青の不思議さの中核では決して無い。また、青本の答案と同様、「幻」の本質を距離の問題として捉えている点も誤読である。よって、この答案も、文章構成が不思議さを説明する形式である点しか評価することはできない。構成点の一点のみが残る。

設問（三）

問題	「そういう裏面のある日常」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	単調な日常の表面的な維持には、内心の暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く刷新することが必要だということ。（63字）

構成フェーズ

- ・ 設問文読解
- ・ 傍線部読解

読解フェーズ

思考の目次

- ・ 「裏面」とは何か？「裏面」に対応する“表面”は何か？
- ・ 「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことか？
- ・ 指示語「そういう」は何を指示しているか？修飾対象は「裏面」か「日常」か？

表現フェーズ

構成フェーズ

設問文は「どういうことか、説明せよ。」という形式だ。これ自体はよくある形式なので、傍線部も見てみよう。この段階で挙げるべきポイントは三つある。傍線部の第一のポイントは、最初の指示語「そういう」である。傍線部だけをみる限りでは、「そういう」が「裏面」という語にかかっているのか「日常」という語にかかっているのかはわからない。読解を進める中で検討する必要があるだろう。第二のポイントは、「裏面」が比喩的な表現であることだ。「裏面」があるということは「表面」が前提とされているということであるので、この対比の構図を答案に表現することが求められるだろう。ただし、傍線部が「日常に裏面があること」という言い方ではなく、「裏面のある日常」という言い方であることから、あくまで傍線部の力点は「裏面」ではなく「日常」にあるため、答案の着地点も「日常」に合わせることは忘れないようにしたい。第三のポイントは、半ば読解フェーズにまたがることではあるが、傍線部に続く文の内容についてだ。傍線部のある文は、「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いと述べている。よって、なぜ「日常」は「季節の乱脈な天候」と相性が良いのかを考えなければ、「そういう」や「裏面」と言った言葉の意味は確定しないだろう。以上の点を踏まえて、読解フェーズでは以下の問いを総合的に検討していくことにしよう。

- ・ 指示語「そういう」は何を指示しているか？修飾対象は「裏面」か「日常」か？
- ・ 「裏面」とは何か？「裏面」に対応する“表面”は何か？
- ・ 「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことか？

まず、「そういう」の中身について検討していこう。「こういう」ではなく「そういう」であるので、ある程度広い範囲を指示していると考えられる。よって、とりあえず傍線部のある第十段落の最初から見てみよう。最初の三つの文である「単調な日々を単調なまま過ごすには、(中略)どこまでも平坦である」からわかるのは、「心」における「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」の対比だ。綺麗な対比の構図がありそうなので、記述を出てきた順番でアバウトな等式関係で結んでみる。

- ・ 「単調な日々」 = 「外から見た心の動き」 = 「表」 = 「平坦」
- ・ 「暴発的なエネルギー」 = 「自分の心のなかで静かに処分する」 = 「表にあらわれでることではない」

わかりやすい動と静の対比構図だ。ただ、最初の文章にあるように、単純な対比関係ではなく、「暴発的なエネルギー」は「単調な日々」を成立させるために必要なものであるという依存関係もあることは注意しなければならない。「万物流転」「諸行無常」といった思想が古今東西にあることを考えると、この考え方は納得感があるだろう。一番難しいのは変わらないことなのである。

続く文章を見てみよう。(A)「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剥ぎとる」とある。これはどういうことか？(後に参照するために問いに記号をつけた。)
「内壁が劣化」した場合に「危ない壁」を剥ぎ取るとされているので、この「内壁」と「壁」は同じものだと考えて良いだろう。では、(A')そもそも「壁」とは何のことを指しているか？傍線部の前には手がかりが見つからないので、傍線部の後を見るしかない。傍線部のある文では、(B)「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いことが述べられている。これはどういうことか？相性が良いということは、おそらく「日常」と「季節の乱脈な天候」の間に少なからず類似点があるのだろう。その様な目星をつけて、次の第十一段落を見てみる。最初の文に「青空」と結びつける形で「見えるはずのない内側の崩れの兆し」とある。まず「見えるはずのない内側」は「暴発的なエネルギー」と非常に似ていることがわかるだろう。「暴発的なエネルギー」は「自分の心のなか」にあり、「表にあらわれでることではない」ものであった。そこで「見えるはずのない内側」と「暴発的なエネルギー」が同じものだとして考えると、「崩れの兆し」の箇所もまた「内壁」についての記述と似ていることに気づく。「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性」とあったことを思い出そう。このことを踏まえると、「見えるはずのない内側の崩れの兆し」と「『暴発的なエネルギー』を隠し持った『日常』の『内壁』の『劣化』の『危険性』」が同じものであることがわかる。

以上のことから、「青空」と「心」がどうやら同じ構図を持っているらしいことがわかるだろう。それを踏まえて、「青空」についての記述(第一段落～第六段落)から、「壁」を視覚的に連想できそうな表現を第十段落に限らず探していくと、第三・第四段落の「破れ目」と第五段落

の「感覚の水位」が見つかる。このことから「青空」における「壁」は、晴天と荒天の間を隔てていたものであり、また、筆者がその破れ目を待つことで、＜日常＞と連続したものとしての＜非日常＞を「予感」していたものであることがわかる。ここから「心」における「壁」を逆算すると、「暴発的なエネルギー」と対比されているのは「単調な日々」であったのだから、「心」における「壁」は「暴発的なエネルギー」と「単調な日々」の間を隔てるものであることがわかる。これが問い(A')の答えだ。なお、このことは本文全体に関する読解であるので、本文解説で述べた全体イメージを参照してほしい。

元の問いである問い(A)についても考えてみよう。「内壁が劣化し全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然と剥ぎとる」とはどういうことか？「壁」とは「暴発的なエネルギー」と「単調な日々」を隔てるものなのだから、「全体の均衡」とは「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」の均衡、つまりは「心」のバランスのことであることがわかる。だとすると、その均衡が崩れかけた際に、その均衡を保っていた「壁」を一掃してしまうとはどういうことか？一掃してしまうと、むしろ均衡の崩壊は加速してしまうのではないか？これについては、再び第十一段落に手がかりがある。最初の文に「見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙に中和する」とある。「壁」を一掃した結果起こるのは、崩壊の加速ではなく、「中和」であるのだ。だとすれば、「中和」されるのは、「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」だと考えるのが妥当だろう。つまり筆者によれば、「心」の均衡が崩れかけた際には、その均衡を立て直すのではなく、むしろ異質なものを一挙に「中和」させてしまい、新たな均衡を作り出すことが必要なのだ。

このことは、先述の問い(B)の答えにも関連しそうだ。「裏面のある日常」が「季節の乱脈な天候」と相性が良いとはどういうことか、という問いである。「心」には「中和」が必要であり、「中和」には「青空」が必要なのだ。なぜなら、「内側の崩れの兆し」が「見えるはずのない」ものであるからである。「見えるはずのない」からこそ、見える「青空」に投影していたのだ。その意味で、「季節の乱脈な天候」は「裏面のある日常」と相性が良いのである。

ここまでをまとめる。人間の「心」は外面的には「単調な日々」である様に見えるが、実はそれと対照的な「暴発的なエネルギー」によって支えられている。言い換えれば、「暴発的なエネルギー」を静止させ続けることこそが外面的な「単調な日々」の内実なのである（ちなみに「静止」という単語は第九段落の最後の文章で用いられている）。その「単調な日々」（“表面”）と「暴発的なエネルギー」（“裏面”）の間を隔てているのが「壁」であるが、それは時として劣化し崩れて「心」の均衡が崩れてしまう危険性がある。そうした際にはその「壁」をむしろ一挙に剥ぎ取って、「単調な日々」と「暴発的なエネルギー」を「中和」させてしまう必要があるのだ。ただし、「壁」の崩壊は、あくまで外から見えない事柄なので、それが見える世界に投影する必要がある。筆者にとって、それが「青空の急激な変化」なのだ。なぜなら「青空」もまた「壁」を持ち、晴天が荒天が隣り合わせに連続して存在するものだからである。

これで読解フェーズで挙げた問いには答えが見つかった。ここまで来れば、「そういう」という指示語は「日常」にかかっていることがわかる。「裏面」のみが重要なのではなく、「裏面」を含んだ平常の均衡と、その崩壊時の「中和」こそが重要なからだ。よって、答案も「日常」を中心に書いてみよう。まずは、一旦本文の言葉をそのまま用いて、答案の骨子を確認する。

「単調な日々を単調なまま過ごすには」、「暴発的なエネルギー」を「裏面」として静止し続ける一方で、「内壁が劣化し、全体の均衡を崩す危険性があれば」、「中和」することが必要だということ。

次に、言い換えを行う。読解フェーズでは字数は気にしない。

単調な日常を表面的に単調であり続けさせるためには、その内側にある暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れかけた際には、むしろ思い切って静止を止めることで、新たな均衡を作り出すことが必要だということ。（103字）

表現フェーズ

またもや表現フェーズが重要になっている。文章構成を大きく改善できる点はないので、個別の表現を変えるしかない。（変えた箇所に下線を引いている。）

単調な日常を表面的に維持するためには、内心の暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れる直前に、むしろ潔く静止を止めることで、均衡を刷新することが必要だということ。（86字）

次に、重要度が比較的低い語を省略していく。

単調な日常を表面的に維持するためには、内心の暴発を平常は静止し続ける一方で、その均衡が崩れる直前に、~~むしろ潔く静止を止めることで、均衡を刷新することが必要だということ。~~

↓

単調な日常を表面的に維持するためには、潜在的な暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く刷新することが必要だということ。（70字）

最後に、動詞をできるだけ名詞化する。（変えた箇所に下線を引いている。）

単調な日常の表面的な維持には、内心の暴発を平常は静止する一方で、その均衡を崩れる直前には潔く刷新することが必要だということ。（62字）

赤本

答案	日常の単調さや穏やかさは、抑圧したまま蓄積した感情の暴発を密かに処理し解消することで成り立っているということ。（55字）			
Schip採点	4点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：0点

内容は概ね正しい。ただ、細かな表現の面で問題がある。「蓄積した」とあるが、「暴発的なエネルギー」は存在はすれど、蓄積しているとする本文の記述は無い。また、「暴発的なエネルギー」を「感情の暴発」としているが、本文にはあくまで「心」と述べられているのみであり、本文の「心」を「感情」だとする根拠は乏しい。さらに、「密かに処理し解消する」の箇所に、本文の「均衡を崩す危険性」という要素や、「平然と剥ぎとる」「一挙に中和する」のニュアンスは含めた方が良好だろう。これらの問題点があるため、表現点は加算されない。

駿台（青本）

答案	日常には、平穏に見える表面とは別に、内部に抱える激しい葛藤を孤独に処理しなければならない危うい面があるということ。（58字）			
Schip採点	4点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：0点

「暴発」は「葛藤」であるという見方をしているが、葛藤には相反する複数の感情の存在が前提とされるので、本文の内容とは少しずれていると言わざるを得ない。また、赤本と同様、「孤独に処理しなければならない」の箇所に、本文の「均衡を崩す危険性」という要素や、「平然と剥ぎとる」「一挙に中和する」のニュアンスは含めた方が良好だろう。これらの問題点があるため、表現点は加算されない。

河合塾

答案	表面的に平穏に見える日常は、そうした状態を維持するために暴発的な力で内面を更新する、外からは見えない心の動きによって保たれているということ。（70字）			
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点

「暴発的なエネルギー」は処分（「中和」）される対象であり、その処分の結果、（第十二段落にある）自分の「変貌」が起きるので、「暴発的な力で内面を更新する」は誤読である。よって、読解点が減点される。

東進ハイスクール

答案	心の中で静かに扱われるがゆえに外には現れない暴発的なエネルギーを内に含みつつも外面的には平穏を装い、時に生じる不穏にも素早く対処して過ごす単調な日々。(75字)			
Schip採点	1点	読解点：1点	構成点：1点	表現点：-1点

「暴発的なエネルギー」が「単調な日々」にとって必要であるという最も重要な点が明言されていない。このことは必要な要素であるだけでなく、最も重要な読解ポイントでもあるので読解点・構成点が共に減点される。また、表現の面では、第一に長すぎるのが問題だ。第二に、「時に生じる不穏」が曖昧すぎることも問題である。おそらく、「平穏」という語と対比させる形で「全体の均衡を崩す危険性」のことを示そうとしたのであろうが、どんな「不穏」なのか説明することこそが重要である。以上から表現点も減点される。

代々木ゼミナール

答案	日常が表面的には単調で平坦な時間の連続に見えながら、その裏側に暴発を起こしかねない大きなエネルギーを静かに秘めているということ。(65字)			
Schip採点	2点	読解点：1点	構成点：1点	表現点：0点

「暴発を起こしかねない」ことではなく、それを処分（「中和」）することについて言及しなければならない。「全体の均衡を崩す危険性」について読解されていることも示されていないので、構成点と読解点が共に減点される。

スタディサプリ（旺文社）

答案	日常は、単調で平坦に見えても生の均衡を突き崩しかねない危険をはらんでおり、平穏を維持するために多大な力が費やされているということ。(66字)			
Schip採点	3点	読解点：2点	構成点：1点	表現点：0点

「暴発」の「処分」について述べられていない。よって構成点が減点される。また、表現の面では、「暴発」が「生の均衡を突き崩しかねない危険」と「平穏を維持するための多大な力」に分散して記述されており、あたかも別の概念のように語られてしまっていることは問題である。

設問（四）

問題	「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られた」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	空の青が赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したとは言え、斯様な日常の崩壊と再生の連鎖こそが筆者の体験の質を高めていくのだということ。（71字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 傍線部は変化について述べている。ということは？・ 変化を起こしたのは何か？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「赤い風船」はどんな点で「青空」のイメージのと対照的か？他方で、共通点はあるか？・ 「赤い風船」は筆者の営みの何を否定したのか？その上で、傍線部の「自負」と「願望」とはそれぞれ何か？・ 筆者はなぜ「奇妙な喜び」と「茫然」を感じたのか？ <p>表現フェーズ</p>

構成フェーズ

傍線部は変化について述べている。よって、基本的には「AからBに変わった」という構成で回答するのが良いだろう。ただし、ここでは「貴重な青」を「吸収」した「赤い風船」も重要である。「赤い風船」によって、「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られる」わけであるが、それによって筆者は、「奇妙な喜び」と「茫然」を感じたのである。これが変化の結果である。よって、この三段構成で回答するのが良い。骨子としては以下のようなになるだろう。これ自体は当たり前のことに見えるかもしれないが、それぞれについて読み解くのはなかなか難しい。だからこそ、読解の過程で俯瞰的な視座を失わないようにしよう。

＜赤い風船＞によって、＜青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られ＞、＜奇妙な喜びと茫然を感じるようになった＞ということ。

内容について詳細に検討していこう。多少読解が難解なので、ひとまず設問に回答することは忘れてじっくり本文を読んでいくべきである。まずは＜赤い風船＞について見てみよう。その色からしてもすぐに「青空」と対比的であることはわかるだろうが、その仔細を丁寧に追うことが必要だ。ここでポイントは三つある。

一つ目は、その動きのリズムである。「赤い風船」は「ふわりふわりと」「一段一段弾むように」「おなじリズム」で動いているのである。「青空」は急変するものであった。ここに第一の対比がある。

続く二つ目のポイントは、「天を目指さず」「降りて行く」ことだ。「青空」のイメージでは、＜非日常＞の体験を通じて「日常の感覚の水位が上がる」ものだった。上下の対立がここにある。そして空自体までが「地上へと引き戻される」のである。ただここで少し注意して欲しい。「赤い風船」は、「青空」自体と、「青空」を見つめる筆者の二つと同時に対照されている。先ほど述べた通り、「赤い風船」は「青空」と対比的な色、そして対比的な動きのリズムを持っていたわけだが、同時に「人の頭ほどの赤い生きもの」でもあるのである。そして、「貴重な青」と「こちらの視線」は「いっしょに地上へと引き戻される」のだ。以上の二つのポイントを整理した。

赤い風船	青空
赤という色	青という色
坦々/泰然と動いている	急変する
「天を目指さない」「降りて行く」 「人の頭ほどの赤い生きもの」	「貴重な青」と筆者の「視線」がともに 「地上へと引き戻される」

だがここで——これが三つめのポイントだが——「赤い風船」は「青空」と対比的であるだけではないことに気づいて欲しい。風船とは通常は上昇していくものではなかろうか。「飛翔の力を失った赤い風船」。「力を失った」ということは、その力は元々はあったということだ。これは風船にとっての異常なのであり、つまるところこの「赤い風船」自体がまた新たなく非日常＞であるのである。

このことを踏まえると、「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られる」ことについても、幾分か輪郭がはっきりしてくるのではなかろうか。「赤い風船」によって消し去られたものは何か？「小さな変貌の断続的な繰り返し体験の質を高め、(中略)べつの出来事を呼び寄せる」ものであったこと、そして本文の最後が「再び失われた青の行方を告げるように、遠く、雷鳴が響いていた。」と締めくくられていることを考えると、筆者のこの「破れ目を縫い直したあとでまた破るような」営みのサイクル自体が失われたしまったとは考え難

い。だとすれば、「赤い風船」それ自体が新たな＜非日常＞であるのだから、「赤い風船」はこの営みのサイクルを新たなサイクルへと刷新した、と考えるのが妥当であろう。「青空の明滅」に対する自己の内面の投影は終われども、このような崩壊と再生のサイクルは続いていくのである。

だとすれば、「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られる」における「自負」と「願望」とは何だろうか？

「願望」はわかりやすいだろう。平穏な日常に欠かせない自己の暴発的な内面は、それ自体見えないものだからこそ、どこかに投影する必要があったのだ。

では、「自負」とはどういうことか？「自負」という言葉が用いられているということは、他者の営みを考慮に入れる必要があるということだ。自負は他者と対比したの中で初めて成立するものだからである。本文の中で他者の営みについて言及があったとすれば、最初の話題である「青空」における「予報」についての記述が思い出される。「晴れわたった青空のもと街を歩いていて、すれちがいざま、これから降るらしいよといった会話を耳に挟んだりすると、何かひどく損をした気さえする」。これが普通の人の営みである。しかし筆者は「しばらくのあいだ青を失っていた空の回復を、私は待つ。崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする」のであった。つまり、筆者は、青空という対象について、その日常と非日常の交差を感じ取ることができる、その営みを体現することができるということに自負があったことが窺える。

だとすれば、そうした営みの対象として依存していた「青空」が消え去ってしまったことは、衝撃的であるはずだ。これこそがきっと「茫然」の正体なのだろう。だが一方で、こうした営みを恒久的なものとしていくためには、「赤い風船」というまた異質なく＜非日常＞の出現は歓迎すべきことでもある。こうした「変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め」るのだ。読んでる私までもが思わず高揚感を感じてしまった。「奇妙な喜び」とは言い得て妙かもしれない。

さて、これらを踏まえると、解答としては、大きく二つの部分に分けて記述すると良さそうだ。一つは、＜自負と願望が消し去られたこと＞、もう一つが、＜営みのサイクルが続いていくこと＞である。そして、あえて大まかに言えば、前者は「茫然」であり、後者は「奇妙な喜び」なのであるから、これらのニュアンスも行かせたら尚良い。一旦、字数を気にせず書いてみよう。

筆者は、青空の急変と回復の中に自己の内面の暴発を見出していたが、坦々と歩道橋を下降する赤い風船という新たな＜非日常＞が突如出現したことにより、依存していた青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と＜非日常＞から再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験へ質を高め続けることができるのだということ。（153字）

書きたいことが多すぎる。大胆な改革が必要であるようだ。泣く泣く、重要度の低い単語を一掃してみよう。

筆者は、青空の急変と回復の中に自己の内面の暴発を見出していたが、坦々と歩道橋を下降する赤い風船という異なる非日常が突如出現したことにより、依存していた青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と非日常から再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験の質を高め続けることができるのだということ。

↓

筆者は、青空の急変に内面の暴発を見出していたが、赤い風船という異なる非日常により、青空のイメージは呆気なく雲散霧消してしまった。しかし、こうした日常の崩壊と再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験の質を高め続けるのだということ。（111字）

まだ長い。。。まずはできるだけ意味を保存したまま単語を短くする。また、前半の主題は実は「青空」であるので、それを主語にしまい、筆者の営みの説明はこれまた泣く泣く削る事にした。

空の青が赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したとは言え、斯様な日常の崩壊と再生の連鎖を通じてこそ、筆者は体験の質を高め続けるのだということ。（75字）

まだ多少長いか。若干無理があるような気もするが、後半の構文を簡単にするため、無生物主語を使う。「連鎖」を主語にしてみた。苦肉の策だが、これで完成だ。

空の青が赤い風船という異なる非日常により呆気なく消散したとは言え、斯様な日常の崩壊と再生の連鎖こそが筆者の体験の質を高めていくのだということ。（71字）

他社の解答例講評

赤本

答案	青空の急激な崩れという非日常を歓迎したいという勇んだ気分が、小さな赤い風船によってしぼんでしまったということ。（55字）			
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点

本質的に何も説明していない。ただ傍線部に「赤い風船によって」という情報を足しただけである。まず、「青空の急激な崩れという非日常を歓迎したい」という前半部はあまりに曖昧である。せめて「なぜ歓迎するか」について一言言及して欲しかった。むしろ傍線部の「青の明滅に日常の破れ目を待つ」という文言の方が本文の内容についての情報量が多い。次に、この解答のポイントはきっと「風船」という物体の「膨らんでいる」というイメージの転用で「気分がしぼ

んだ」という解釈が成り立つ、という点なのだろうが、本文にその解釈を支持する根拠は見当たらない。よって、この答案は何も説明していないことになる。

駿台（青本）

答案	遠い青空の非日常に自己の救いを求める思いが、地上の赤い風船という別の非日常との遭遇によって快く否定されたということ。（58字）			
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点

赤い風船は「別の非日常」であるという点は同意できる。しかし、「思いが否定された」だけでは、筆者の営みのどこが否定されたかが曖昧なままだ。また、「快く」だけでは何も感情の説明になっていない。なぜ否定が「快く」もあったのか。それらが曖昧なまま回答されているため、読解点を減点した。

河合塾

答案	青い空の崩れと回復に呼応する、絶えざる自己刷新への確信や期待が、降下していく風船の赤に目を奪われることで、もろくも失われてしまったということ。（71字）			
Schip採点	1点	読解点：0点	構成点：1点	表現点：0点

自己刷新自体への確信や期待は失われていないと考えるのが妥当だろう。自己刷新自体は「べつの出来事」においても続いていくのである。自己刷新自体への確信や期待を失わせてしまったことから、「奇妙な喜び」の説明もできていない。それまでの信ずるものや期待していたものが一掃されて何が喜ばしく思えるのだろうか？「自負」について述べようとはしているが、自負であるからには「確信」という言葉よりは「自信」という言葉が適当であろう。

東進ハイスクール

答案	心の暴発を秘めた日常を夏の不安定な天候に重ね、新たな出来事を呼び起こす天空の青の急激な変化への待望が、突然に地に降りた風船の異質な赤によって消えたということ。（79字）			
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：1点	表現点：-1点

長すぎる。かつ読みにくい。最初の句読点までの節と次の動詞節が「待望」という名詞にかかっているのだろうが、かなりわかりづらい。これでは、「暴発」を空に重ね合わせたり新たな出来事を呼び起こすのが、筆者の青の明滅に対する感性や営みではなく、「待望」自体であるように見える。それはおかしいだろう。また、「心の暴発」という言い方も気になる。単に広く「心」ではなく、その内面性が問題となっているのであった。また、「待望」が消えたというだけでは、この答案も、筆者の営みのどこが否定されたかについて曖昧性を残してしまっている。

代々木ゼミナール

答案	平凡な日常を思わせる空の青の中に突然の非日常の訪れを待つ高揚した気分が、視線を現実には誘う赤い風船によって急速に失われたということ。(65字)				
Schip採点	0点	読解点：0点	構成点：0点	表現点：0点	

この答案は、赤い風船によって「高揚した気分」が「現実」に引き戻されたと主張している。つまり、青の明滅に自己の内面を重ね合わせる営みはいわば「現実離れしていた」「浮き立っていた」ということであるが、これについて本文から明確な根拠は見出せない。また、「自負と願望」が一言で「高揚した気分」に置き換えられてしまうのはあまりに乱暴だ。「奇妙な喜び」についての説明しようとしている気配はない。

スタディサプリ (旺文社)

答案	青空の崩れと回復に非日常と日常性の回復を重ね見て、世界が改まったことを確信する思いが、別の非日常に出会うことで打ち消されたということ。(68字)				
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：2点	表現点：0点	

それなりに綺麗にまとまっている。だが、「世界が改まる」とは何のことを指しているのか不明瞭だ。また、「奇妙な喜び」についての説明もない。

※他社解答例の採点結果 (最高点は20点)

	赤本	駿台 (青本)	河合塾	東進	代々木
設問 1	3点	1点	3点	4点	0点
設問 2	1点	1点	0点	0点	1点
設問 3	4点	4点	3点	1点	2点
設問 4	0点	3点	1点	0点	0点
合計	8点	9点	7点	5点	3点
得点率 (%)	40%	45%	35%	25%	15%